

軍陳  
備要

救急摘方續編

全

ヤ 9

1139



軍陣  
備要  
救急措方

西村正徳蔵書

救急措方續編自序

皇天津神のみらるしん四方を  
 ら。天れ聖きしし極る。國のいこを港。  
 青雲の柳川はく。白雲ののりる  
 しん。とらる。ま海東と。極極  
 か。しん。舟の極るをら。あさつこを。  
 大海の船をら。しんけ。極國と。極く。

序一

一國を平る。昔はたはつ十  
調りくひくひたりとてはく。

皇大神祇のまじりて居るまじりて  
延喜式新年宗の祝詞よひ情  
しきめく我日本ははく地四方ま  
照しん。日神の清く海のまろ  
りたる國にりてはく。日神の

清りたる。照しん。まろなる  
つちのつちのつちのつちのつちの  
まじりて居るまじりて居る  
かろく。神日本盤余をたご日  
向の國より都らと大和の權を  
國にりてはく。

八百九十一年の冬に華に  
使節を遣はし。其の節  
は。高麗。西國の海に我邦  
に。流る。故に。海  
軍。増築。中。回。入。の。勢。に。力。を。入。す。  
十年。に。海。軍。の。勢。に。力。を。入。す。

唐。の。使。節。に。對。し。て。は。唐。の。使。節。に。對。し。て。は。  
唐。の。使。節。に。對。し。て。は。唐。の。使。節。に。對。し。て。は。  
觀。望。の。勢。に。力。を。入。す。唐。の。使。節。に。對。し。て。は。  
唐。の。使。節。に。對。し。て。は。唐。の。使。節。に。對。し。て。は。  
唐。の。使。節。に。對。し。て。は。唐。の。使。節。に。對。し。て。は。  
唐。の。使。節。に。對。し。て。は。唐。の。使。節。に。對。し。て。は。

三 沖 後 後 一 一 後 一 一 後  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

一、  
の  
韓國は、  
日と  
と、  
國に、  
海に、

海の、  
は、  
は、  
は、  
は、  
は、

ともくみくひをこころにのこす  
 はなはなほくろくをこころにのこす  
 心くみくひをこころにのこす  
 心くみくひをこころにのこす

め辰のころをゆく  
 りくみくひをこころにのこす  
 守地池

目次

- 一 陣取べき地と擇用べき水と檢惣て陣屋と構る心得の事
- 一 在陣の隊長歩卒おとこの心得の事
- 一 食傷霍亂及一切の毒小中多ると救心得の事
- 一 傷寒時疫瘧疾痢病をづく傳染べき病の心得の事
- 一 凍死と救心得の事と拾遺
- 一 溺死をとくふらえろえろえろえろと拾遺
- 一 金創と療ずる心得の事拾遺
- 一 銃丸の創と療ずる心得の事拾遺
- 一 勇氣と長ずる必驗の妙薬の事と

一藥方八首

以上

一 軒床へり出り 軒床へり出り 軒床へり出り 軒床へり出り 軒床へり出り  
目次

救急摘方續篇



陣取べき地を擇び用ふべき水を檢し惣て陳屋  
と構る心得のこと

若伐築陣屋を營んとたれりふハ高燥清淨にして進  
退自在なる地と擇卑濕隆宍ある漸淤糞壤などの地  
ハ一切用廢らば僅小地を穿て水の出る地ハ濕氣  
多くトて人小中易いさきどその涌出る水の清濁小  
らりく地の美惡ハ預察し知らざるべけまバこれを檢  
覈し其區別よく留意て稽核べし且陣屋小をん  
とたれりふ近きところれ村里の井ちとハ港澤水及山



吐トの清水シズミとも汲ツクと熟トクと其色シキを覽ミて後ノチ小コこを試シ嘗シて  
其味ミと試シ毒ドクなりとハ知らラまらずらも港ミナト澤サハ清水シズミ  
ななどの流ナリて止トずるもの。泥土ツチケと交マシて混濁ニゴリたるらこ  
ままと襲カサ布フより再コ三ス濾過スととき小コハねねなくハ清水キヨキとな  
れども陣チン中チュウへへを度ヨキ布フと前マ後ゴ三幅サンブツと以もつて二重ニジュウの帛ヒト  
この濾コ帛ヒト若モシ汚穢ヨウタイする物モノの交マシて水脚スイカクの多オホきものハ  
炭末タンマと入イて攪カキて暫シバシバおおきその上清ウハズミと濾コて用ヨウべべ一ヒト或アルハ  
泥菖ニヤウの葉エハもも一ヒトくハ根ネを多オホく刈カとらとせて四五寸シヨウづづ  
小切コキららたたを裂サキくくららしてして数カズ多オホく束ツカて水中  
へ入イて静シズカるる處トコロ一ヒト置オクととき小コハ汚濁キヨウダクハ泥菖ニヤウ葉エハもも一ヒトく

根ネ小コ就ツキく底ソコ小コ沈シヅむものものなり。泥菖ニヤウを油アブの水ミヅ一ヒト交マシつつ  
をも妙タマシ小取コトルものものありあり混堂コンドウ小コちこの葉エハを蓄ツクおおききて  
もも一ヒト過スグて燈油トウアブと湯ユの中ナカへ落オトるるとき小コ此物コノモノを以もつて  
上面ウエ小浮コウキする油アブと集ツクて除去キヤクととり除ノりりたたすすべて腐クサレ  
水ミヅ小コハ人の眼メ小コここをみみるる時トキも夥オホシく蟲ムシと生ナずずるるも  
ののちちままば汲ツクて日數カズを歴ヘつつる水ミヅハ決キして嘸ムべべううららむむ  
大小オホコト小害コガイあり予嘗オノカて夏月ナツキ關泉カンセン戸井コノイの水ミヅと汲ツクて  
日ヒのああららるところところ一ヒト寘オキて試シつつたた一ヒト時トキを過スグすすて  
蟲ムシと多オホく生ナつつるるをみみるることあり故ユ陣中チンチュウの水ミヅ  
ハ必カナラ日ヒ毎コト小新コトとななるる水ミヅを汲ツクて用ヨウふふ一ヒトずず不潔ヨカラヌ

水と卒ニハカ小清浄シヨウジヨウうをむと飲オモハ、醋スと少許スコシヨウ水中へ入イよ  
く攪カキマゼて後小重布カサネヌ小濾コシて用ヨウふ處トコロ一其量大畧ソノシヨウキョウアラハシ水一斗小  
醋ス二三合ニサンカウと加カてり。醋スハ敗壞ツクサレ易ヤスき物モノはくハクくク蟲ムシの化生カセウ  
はら又マタも一地チと穿ホルこと深フカうらむマして清水キヨクの沸出ワキると  
ころたたらバ井イと多く堀ホコきて礫イソ小砂コナと交マゼて底ソコへ入イる  
がより原子ワタシの若草ワカクサ小陣取コチンする處トコロ小古井ココノイありバ汲クミ盡ツクシ  
て後小涌出ソウする水ミヅと汲クミて用ヨウふべき水ミヅと試コトバ  
るふる蠟燭ロウソクととり井中へ下オロシてふる小消コキユるハ毒ドクあ  
りそまじマハ新ニき水ミヅと外ソトより汲クミ来キり上ウより多オシく井の  
中へ入イる鬱氣ウツキと散チして後ノチまた火ヒと下オロシして試コトバべし

とく火ヒの消キざるハより流清リウシヨウき川カハの水ミヅハ用ヨウふべし  
とソ急イどト毒蟲ドクムシ毒艸ドクショウ或ハ砒石ヒサウをノ源ノありハ水  
小必毒コヒトクあること古イニシより戒イニシるル天水桶テンスイケの水ミヅも止水トメ  
も同ドウくク用ヨウふべしベシうらぐとソ急イりリこの井戸イノイと試コトバる  
法ホウもまマ用ヨウふべし地窖チカウなノを卒ニハカふあけて忽タチマその鬱ウツキ  
氣キ小中コナて斃シメこノゆユあるもこの古井コノコノイの毒ドクと同ドウふフ  
てトもトト中ナカりて昏冒失氣コンボウシキのノあらバ嚴醋キウキョウと面オモ  
吹フけ口クチへも嚙カミむれば必効カナシあるものなりナリとて  
陣屋チンヤと建タツるル陰鬱インウツて風カゼの透トホらぬ處トコロ及ト樹木ジュボクなく  
て常トコ小蹄コツある地チハ決ケツして可ヨクうらぐルとてあ

まゆ小樹立茂コダチシゲまたるところもまた好ましくうらぐ樹  
立茂タモ地ハ毒蟲毒蛇住スミカシキニルて炊煮カシキニルとろろの食臭タモクカラリと尋来  
り鍋釜ナベカマの中へ陷オチリ多る候知チびりて食モリタルトコロひ害ガイとならるる  
やうにあまばなや然シカのそなうら陰鬱カケの山陰カケなぐハ濕シツ  
氣多ケく風の洞徹トホラぬ地小瘴氣トヨキとりやぐ人小中アチリて病と  
なや温疫瘡痢ウンキオオリリヒヤカなぐ厲氣アシキキあまばうらる地小ハ  
決カして陣屋タツと建べうらばとて陣屋タツと建る小ハ西  
日のふうくさういらぬ南の方廣ヒロく後小餘地ウレロヨチある處  
をうらうらまた終日イチチテ日のあうらぬ處トコロもよるうら  
むらぶて南北へ風の往来カヨフやううらて炎暑アツサの凌シギ小可ヨキ

やう小まき冬日スマサヤスも住居易アアタく衆多の軍勢の群居ムレキルハ  
とらるるバ務ツトて清爽サワヤカうらて隅スミぐやぐても風のうら透トホや  
うらをねく人を損ソコナフこと多カチくは豫カチてうらうの意用ヨロエ  
あまらるるさうあり故小戸障子シヤウジもなうらけ明ケおきて  
清氣キヨキキと引入カケレ汚穢フジヤウ不淨フジヤウの氣キのふまやうらうらあ  
緊要カンジンあり此衆人コノオホクニトシ群居ムレキルて鬱蒸氣ムシタルキし人小害ガイあるものを  
まば將士隊長シガシラモシガシラたる人ハ意ココロと注務ツツメて陣屋サウジの掃除サイと催  
促ソドし間マおと小清爽サワヤカうらて氣キの鬱敗コモラぬやうらうらこ  
とを下知シとて一ヒト厠ヘシ及芥窖ハキタメをどら陣屋サウジの北キタの方カタの樹ツレ  
陰カゲをどら造ツクリて日ヒのさうぬやう小臭穢クカミの氣キの風カゼ小乘ソツレ

て陣屋の方へ来ぬやう小を巻く。殊炎暑の頃ハ敗壞  
物糞尿の臭氣も人の體小觸呼吸小從て體中へ侵入  
とききつたうら病と醸了原因とするものなきは  
思理よくべきことなり。若草小く不正の氣を避  
霖雨の時ハ断火を焚る。往古燧燧と離るる持はるるの  
用意あること推察べし凡生類のうら人の靈火と生火  
と第一の妙とをさきとさき。室屋園林臺榭池館廢寺古塔久  
開ずるところへ湯水入べし。火と焚烟とて惡氣惡蟲を去る。陰  
鬱の氣入と害は。火と焚烟とて惡氣惡蟲を去る。古木繁  
蟲ハ夏ハ樹陰を尋るものなるは。況や烹飪とて。心を得ず。毒蟲  
夏小多々。ハ烟小畏て墮るることあり。意外の毒とつ古洞  
巖窟小雨露と避んとて。湯水入る。先火を焚て後水入る。  
深洞ハ火をある。常の松明とて。烟より入得た。毎の松明と用  
べし。洞窟の毒ハ古井の毒と同意なり。野原とて。火は。包。古  
と。足元へ火を放ち火の近づくと。燒拂べし。太古日本武尊の尊

難の寶劍小燧燧と添て帶るる。燧燧小糧米食  
用意の藥を入て。刀脇差の栗形。結付る。糧米食  
物の事ハ大将より。懇小下知と隊長つて。自身小も點  
檢て。うらうら炊煮と慎麤惡物半熟物などをあきらけ  
喫とぬやう小を巻く。往古と違ひ。脆弱多病るる。士人の  
多。今の世は。往古の兵糧の制の中。小の裁量  
ある。さき。おむる。腸胃に馴るる。食事  
より。遂小ハ病死するもの多くなりぬ。ハ下知の倦切  
らぬ。主將の過失なり。つた。歩卒の賤さ。ものありと  
も。これを輕視て。虐使食物などの事。も。疎放  
るる。不仁の至。うら。鋒尖の鈍。起本。愛憐の

情深シロフカ人小コト馬ウマをスらシよくシ馴ナてシ自在ジザイなるものなり。  
況シテて人小コト對タイしてシ眞實シンジツ仁愛ジンアイの情コトなることとさ小コト大事ダイジの  
用ヨウ小コトつもの小コトあらラず。惣サマての事コト上ウ下カ小コト佐サらシ下カを  
上ウ小コト惠ケれてシ世セの中ナカにシ事コトハ立タてシのなるをスよくシ己ミ小コト顧コ  
てシ深くフカ慮オモヒべシさシとシれラずヤ。我邦ワカ往古ウヤウコの軍法クニノホウのガとシもシ今イマの  
昔ムカシの人の糟粕ソウハクをス採トリ用ヨウしテるコトもシ多タくシ多タくシ一ヒトにシ能コト其意コト  
と得トクてシるコトと學マナぶコトハ裨益ヘイイキをス一ヒトにシといハふコトもシ多タくシ一ヒトにシ能コト其意コト  
西洋セウヤウ人の戦法セウヤウノセウポフハ迂回ユウクワイ小コト紙上の空談シヤウノクウタン小コト近キンこトの甚多シヤク。今イマの  
詔ミコトノヲシと舉トク曰イハレ我陣營ワカノアサタケより撃ウツクてシ出デてシ敵テキと誘ユウ出デしテ戦セウ  
の地形チキョウと揚ヨウぐシみテ諸兵シヨウヘイの性質シヤウショウ小適コトク此コト十分シフブの衝ウツと為ナるコト  
何ナニの敵地テキチ小上陸コトウリクしてシ諸兵シヨウヘイの性質シヤウショウ小適コトク地チ因インのガと得トク人ヒト笑ウツク  
握ウツ小銃コトウ砲ポウと用ヨウるコト能コトざラるコト水虎スイコの陸リクへ  
上ウりシるコト必カナラ定カタ我ワカ爲ナ小俘コトウとせラるコトもシ多タくシ一ヒトにシ能コト其意コト

在陣中隊長士卒等の心得の事

隊長チウジヤウハシしシりシつシつシでもシあシらシずシ。歩卒フソよりシもシ。  
炎暑エンショの頃コト日陰ヒカゲ々々シとシ處トコロ小久コトク憩ケイ止チをスらシずシ。殊シテて假カ  
寐ネたシもシするコトもシ。嚴戒エンケイをス身熱ミネツもシもシ。俄ニガ小衣帶コトモノ  
と解トキし涼氣スズシとシるコトもシ。これハ養生シヤウシヤウのガめシ小コトをスらシぬコトのみ  
とシてシ誠マコトてシ嚴密エンミツたシらシぬコト不慮フリョの敗マクとシるコト。清スミなりシとシもシ。鬻沸水ユウヒツなどシ  
と試シむコトしてシ安小コト嚙クムをスらシぬコト。恣シ小コト西瓜甜瓜シヤカアムメカなどシをス貪喫オンキツ  
べシらシるコトもシ。知チぬコト草クサと採喫サイキツこトとシるコト毒小中ドクコチュウて卒死ソツシ  
しシるコトを見聞ミキクとシるコトもシ。草毒クサドクと解トキしシるコトもシ。大酒ダイシウハ素モト  
アキ嚴禁ケンギンべシ陣中ジンチュウハシらシ何時ナニトキ事コトあらシんコト。預計ヨクケイとシるコトもシ。  
六

たゞ酒小沈<sup>コ</sup>酖<sup>フ</sup>て不覺<sup>フ</sup>をとり。後のもは笑<sup>ワ</sup>とかり。あらん<sup>オモヒ</sup>を顧慮<sup>オモヒ</sup>て在陣中々酒を飲<sup>ム</sup>ことと誠<sup>マコト</sup>を。水戸の義公も、この事とのをいひて陣中々酒ハ、つらむを停止<sup>テウジ</sup>を。武士多々もの酒氣<sup>シゼン</sup>伐用<sup>ハゲマ</sup>て勇氣<sup>キレシ</sup>と勵<sup>テウジ</sup>をハ本意<sup>イニシ</sup>あらば、自然<sup>シゼン</sup>の事あらバ酒を緊<sup>キレシ</sup>く停止<sup>テウジ</sup>を。戒<sup>イニシ</sup>多々ひなり。況<sup>イシ</sup>や酒の為<sup>エヒ</sup>小昏睡<sup>フシ</sup>て覺<sup>サイ</sup>つたさうま。ハ精神<sup>コ、ロ</sup>錯亂<sup>ミダレ</sup>多々。さ小ハ勇氣<sup>キレシ</sup>もろま。為<sup>タメ</sup>小挫折<sup>ツジケ</sup>、遂<sup>ツト</sup>小ハ不忠<sup>フシユ</sup>の人となんことと。顧怖<sup>カヘリコソシ</sup>て常<sup>トコ</sup>小こま。と心<sup>ココロ</sup>小礎<sup>イニシ</sup>て忘<sup>ワスル</sup>ることなく。歩卒<sup>オホゲシ</sup>の末<sup>スエ</sup>もつと。西<sup>ニシ</sup>山<sup>ヤマ</sup>公<sup>キミ</sup>の仰<sup>カク</sup>と堅<sup>カタク</sup>く。

守<sup>モ</sup>らるる。大将<sup>オホノガシラ</sup>隊長<sup>チウジ</sup>の陣廻<sup>イロソク</sup>疎放<sup>ソウホウ</sup>。支<sup>ゲ</sup>揮<sup>キ</sup>小懈怠<sup>オコタリ</sup>あま。士卒<sup>シユシ</sup>の心<sup>ココロ</sup>。從<sup>シユ</sup>て此<sup>コノ</sup>處<sup>トコロ</sup>より。身體<sup>シニヤク</sup>もま。柔弱<sup>ヨウラク</sup>なり。刀<sup>タガ</sup>又<sup>マタ</sup>ハ必<sup>カナラシ</sup>録<sup>ロク</sup>。この事<sup>コト</sup>心得<sup>ココロエ</sup>べし。前<sup>マエ</sup>篇<sup>ヘン</sup>小氣<sup>コキ</sup>と養<sup>ヤウ</sup>て衛<sup>エイ</sup>氣<sup>キ</sup>と。在<sup>シテ</sup>陣<sup>ジン</sup>中<sup>チュウ</sup>を務<sup>ツツ</sup>て身<sup>ミ</sup>を清<sup>シヨウ</sup>淨<sup>ジヨウ</sup>。數<sup>スウ</sup>沐<sup>ボク</sup>浴<sup>ヨク</sup>。浴<sup>ヨク</sup>後<sup>ゴ</sup>小<sup>コ</sup>ハ必<sup>カナラシ</sup>水<sup>スイ</sup>と灌<sup>カン</sup>く湯<sup>ユ</sup>の温<sup>ユン</sup>氣<sup>キ</sup>を速<sup>スウ</sup>去<sup>ソ</sup>皮<sup>ヒ</sup>膚<sup>フ</sup>の清<sup>シヨウ</sup>涼<sup>リョウ</sup>を。やうあを。浴<sup>ヨク</sup>後<sup>ゴ</sup>小<sup>コ</sup>ハ必<sup>カナラシ</sup>。周<sup>シユ</sup>身<sup>シン</sup>へ循<sup>シユン</sup>環<sup>クワン</sup>して。肌<sup>クニ</sup>膚<sup>フ</sup>固<sup>コ</sup>密<sup>ミツ</sup>。尤<sup>モトモト</sup>。河<sup>カ</sup>流<sup>リウ</sup>近<sup>キン</sup>。さあ。河<sup>カ</sup>水<sup>スイ</sup>小<sup>コ</sup>浴<sup>ヨク</sup>て身<sup>ミ</sup>を浸<sup>ヒタ</sup>るも。且<sup>カツ</sup>衣服<sup>イフク</sup>ハを汚<sup>ア</sup>垢<sup>カ</sup>づらぬもの。着<sup>キ</sup>更<sup>カエ</sup>ふ。

こと尤佳ヨクけまで陣中じんちゆうよりくいろもちりでいたりごき  
そのちりまは朝夕あさゆふ小衣せういと脱ヌキてよく鬱塞うつそくもるキ氣を振去ふるき  
さるミツラアヒル灌水かんすいハ陣中じんちゆうに在あひごハ大將士卒たいしやうしづともに寒暑かんしよ  
の差別さべつたるく勉て水と多く浴あびて身體の振戦ふるせんなどいず  
るふと尤ヨク可かくくして懈怠ぶまば媵理固密こみつをてよ  
く寒暑かんしよ小堪せうたへらま深夜しんや小雨雪せうゆきと侵雲霧うんきよと凌て往來  
く身を體を小妨害せうまがいをやうくのそならび感  
冒中暑ぼくしよ等の患を少く起居きよこ便捷べんてん精神しんぱん爽快くわいかいもさるその  
妙舉めうてりくくのそならびあり、水の効あり、ことハ素問そもんと始始  
日本紀元正げん天王てんわう紀紀榮花物語えいがものがたり朱雀院しゆくわく御灌みかんすい水水大鏡たいきやう三條院さんじやう御拈みでん水水  
徒然たら章しやう續そく古事談こじだん長秋記ちやうしゆき餘よ日に記きに史し記きに大倉公傳たいくらこうでん後ご漢書かんしよハ

うび三國志さんこくし引ひとく華陀わだ別傳べつでん潜確せんかく居類書きるいしよ儒門事親にうもんじしん瘟疫論えいびろん傷  
寒熱病論えんねつびろん等阿含經俱舍論十誦律をみ他た多たくんえり  
河水が小侵せうしんり拍浮などと習ふく尤よくあるいハ海の中ちゆう  
小も入水を潛かりくて身を馴こと為うり軍人ぐんじんハ水を  
泳ことと知らずまるいぬ死のそとあまば也平  
常小氣息じやうせうきよく調ハ水底すいせい小投せうてうてもまらくハ堪こらるも  
のあり又人の體を始はじめて生あるものハ胸肋の間ちゆう  
小肺はく臟を呼ひりて外げ氣を吸いりて呼いき出す内外とも小互小雁と  
氣の外の外より張はり呼出すハ氣の内の内より張はり故小張と壓との二ッ  
の運動の元のハツるて畢ひつての天地の間の充り塞まりる浩然の  
氣の往來のを對膜囊まくなんの呼吸こくき小從せうじゆうて縮ちゆくり張りまるる  
枕カ小由ものあり革と以て造る素籛を  
六と素籛の如く以て譬を喻するたりたりならずびありて其

中空<sup>ウツロ</sup>虚る色<sup>シキ</sup>バ。多<sup>オホク</sup>く過<sup>アヤク</sup>て水<sup>ミヅ</sup>不<sup>ズ</sup>落<sup>ツク</sup>るも。心<sup>ココロ</sup>識<sup>チ</sup>顛<sup>テン</sup>倒<sup>ダウ</sup>  
と<sup>シ</sup>び周<sup>アソビ</sup>章<sup>テ</sup>狼<sup>ウロ</sup>狽<sup>タユル</sup>あ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>な<sup>ク</sup>る色<sup>シキ</sup>バ。胸<sup>ムネ</sup>肋<sup>リツ</sup>より上<sup>ウヘ</sup>ハその<sup>ソノ</sup>水<sup>ミヅ</sup>  
上<sup>ウヘ</sup>不<sup>ズ</sup>浮<sup>ブ</sup>出<sup>デ</sup>る溺<sup>ニョク</sup>死<sup>シ</sup>もの<sup>モノ</sup>不<sup>ズ</sup>あ<sup>ラ</sup>ず<sup>ズ</sup>往<sup>オキ</sup>歳<sup>トシ</sup>墨<sup>スミ</sup>水<sup>スイ</sup>より<sup>ヨリ</sup>つ<sup>ツ</sup>なる<sup>ナ</sup>  
その<sup>ソノ</sup>捨<sup>ステ</sup>つ<sup>ツ</sup>る<sup>ル</sup>心<sup>シン</sup>。河<sup>カ</sup>流<sup>リウ</sup>の<sup>ノ</sup>上<sup>ウヘ</sup>不<sup>ズ</sup>塵<sup>チリ</sup>芥<sup>アサ</sup>不<sup>ズ</sup>推<sup>オサ</sup>ま<sup>マ</sup>て<sup>テ</sup>赤<sup>アカ</sup>子<sup>コ</sup>の  
潮<sup>シホ</sup>不<sup>ズ</sup>從<sup>ツレ</sup>て川<sup>カハ</sup>上<sup>ウヘ</sup>へ流<sup>ナ</sup>の<sup>ノ</sup>不<sup>ズ</sup>り<sup>リ</sup>と<sup>ト</sup>拾<sup>ヒロヒ</sup>とり<sup>リ</sup>て養<sup>ソダ</sup>育<sup>ダ</sup>する<sup>ル</sup>  
者<sup>モノ</sup>あり<sup>リ</sup>し<sup>シ</sup>ふ<sup>フ</sup>その<sup>ソノ</sup>赤<sup>アカ</sup>子<sup>コ</sup>ハ衣服<sup>キルモノ</sup>と襲<sup>カサ</sup>着<sup>サ</sup>る<sup>ル</sup>を<sup>ヲ</sup>仰<sup>アハ</sup>向<sup>ムキ</sup>て<sup>テ</sup>  
腹<sup>ハラ</sup>の<sup>ノ</sup>上<sup>ウヘ</sup>ハ水<sup>ミヅ</sup>中<sup>ナカ</sup>不<sup>ズ</sup>浸<sup>ヒタ</sup>り<sup>リ</sup>。胸<sup>ムネ</sup>より上<sup>ウヘ</sup>ハ水<sup>ミヅ</sup>の上<sup>ウヘ</sup>より<sup>ヨリ</sup>あり<sup>リ</sup>て<sup>テ</sup>階<sup>ハシ</sup>  
夜<sup>ヨ</sup>な<sup>ク</sup>ら<sup>ラ</sup>唯<sup>タジ</sup>呱<sup>ウガ</sup>と<sup>ト</sup>啼<sup>ナク</sup>聲<sup>コエ</sup>を<sup>ヲ</sup>識<sup>シル</sup>方<sup>バ</sup>不<sup>ズ</sup>採<sup>トリ</sup>得<sup>エ</sup>て<sup>テ</sup>引<sup>ヒ</sup>舉<sup>ゲ</sup>し<sup>シ</sup>  
なり<sup>リ</sup>。また<sup>マタ</sup>吾<sup>アツマ</sup>妻<sup>マ</sup>橋<sup>マシ</sup>の上<sup>ウヘ</sup>より<sup>ヨリ</sup>身<sup>ミ</sup>を<sup>ヲ</sup>投<sup>ナゲ</sup>る<sup>ル</sup>婦<sup>メ</sup>人<sup>ニ</sup>が<sup>ガ</sup>中<sup>ナカ</sup>流<sup>リウ</sup>を<sup>ヲ</sup>  
漂<sup>タドリ</sup>を<sup>ヲ</sup>り<sup>リ</sup>。兩<sup>リウ</sup>親<sup>シン</sup>の<sup>ノ</sup>法<sup>ホウ</sup>名<sup>メイ</sup>より<sup>ヨリ</sup>あ<sup>ラ</sup>ん<sup>ン</sup>彌<sup>ミ</sup>陀<sup>ダ</sup>の<sup>ノ</sup>名<sup>メイ</sup>と<sup>ト</sup>互<sup>タガヒ</sup>不<sup>ズ</sup>

稱<sup>トナ</sup>つ<sup>ツ</sup>死<sup>シ</sup>ん<sup>ン</sup>と愚<sup>オロカ</sup>癡<sup>カ</sup>不<sup>ズ</sup>も思<sup>オモ</sup>念<sup>ヒ</sup>する<sup>ル</sup>もの<sup>ノ</sup>とみ<sup>ミ</sup>え<sup>エ</sup>こ<sup>コ</sup>を<sup>ヲ</sup>稱<sup>トナ</sup>  
る<sup>ル</sup>不<sup>ズ</sup>隙<sup>ヒマ</sup>を<sup>ヲ</sup>る<sup>ル</sup>水<sup>ミヅ</sup>底<sup>ソコ</sup>へ<sup>ヘ</sup>没<sup>イル</sup>入<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>ら<sup>ラ</sup>ず<sup>ズ</sup>流<sup>ナ</sup>る<sup>ル</sup>を<sup>ヲ</sup>大<sup>ダイ</sup>橋<sup>キョウ</sup>  
より<sup>ヨリ</sup>偶<sup>タヅ</sup>漕<sup>ソウ</sup>来<sup>ライ</sup>る<sup>ル</sup>舟<sup>フネ</sup>を<sup>ヲ</sup>呼<sup>ヨビ</sup>て<sup>テ</sup>助<sup>タ</sup>さ<sup>サ</sup>せ<sup>セ</sup>し<sup>シ</sup>こと<sup>ト</sup>あり<sup>リ</sup>たる<sup>ル</sup>  
う<sup>ウ</sup>る<sup>ル</sup>類<sup>ルイ</sup>より<sup>ヨリ</sup>ても<sup>モ</sup>人<sup>ヒト</sup>の<sup>ノ</sup>體<sup>タイ</sup>ハ<sup>ハ</sup>お<sup>お</sup>の<sup>の</sup>づ<sup>づ</sup>ら<sup>ら</sup>水<sup>ミヅ</sup>不<sup>ズ</sup>浮<sup>ブ</sup>べ<sup>ベ</sup>き<sup>キ</sup>  
や<sup>ヤ</sup>ら<sup>ら</sup>不<sup>ズ</sup>生<sup>ナ</sup>成<sup>セイ</sup>する<sup>ル</sup>造<sup>ゾウ</sup>化<sup>カ</sup>の<sup>ノ</sup>巧<sup>カウ</sup>妙<sup>ミョウ</sup>を<sup>ヲ</sup>觀<sup>ミ</sup>ふ<sup>フ</sup>足<sup>タレ</sup>り<sup>リ</sup>鳥<sup>タニ</sup>獸<sup>モノ</sup>の<sup>ノ</sup>類<sup>ルイ</sup>も<sup>モ</sup>ま  
ま<sup>マ</sup>この<sup>ノ</sup>肺<sup>ハイ</sup>臟<sup>ザウ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ズ</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>急<sup>キウ</sup>犬<sup>イヌ</sup>猫<sup>ネコ</sup>な<sup>な</sup>ど<sup>ト</sup>を<sup>ヲ</sup>水<sup>ミヅ</sup>へ<sup>ヘ</sup>投<sup>ナゲ</sup>入<sup>ル</sup>ても<sup>モ</sup>水<sup>ミヅ</sup>  
と<sup>ト</sup>游<sup>ユ</sup>で<sup>デ</sup>岸<sup>キシ</sup>へ<sup>ヘ</sup>還<sup>カエ</sup>来<sup>ライ</sup>る<sup>ル</sup>なり<sup>リ</sup>魚<sup>イサ</sup>を<sup>ヲ</sup>腮<sup>サエ</sup>を<sup>ヲ</sup>以<sup>モ</sup>て<sup>テ</sup>肺<sup>ハイ</sup>不<sup>ズ</sup>代<sup>カ</sup>て<sup>テ</sup>呼<sup>イ</sup>吸<sup>キ</sup>す<sup>ス</sup>  
る<sup>ル</sup>が<sup>ガ</sup>故<sup>ユ</sup>不<sup>ズ</sup>別<sup>ワ</sup>れ<sup>レ</sup>不<sup>ズ</sup>腹<sup>ハラ</sup>内<sup>ナカ</sup>に<sup>ニ</sup>懸<sup>ケ</sup>と<sup>ト</sup>名<sup>ナ</sup>づ<sup>づ</sup>く<sup>ク</sup>る<sup>ル</sup>氣<sup>キ</sup>胞<sup>ポウ</sup>あり<sup>リ</sup>て<sup>テ</sup>その<sup>ノ</sup>浮<sup>ウ</sup>  
ん<sup>ン</sup>と<sup>ト</sup>す<sup>ス</sup>る<sup>ル</sup>不<sup>ズ</sup>體<sup>タイ</sup>と<sup>ト</sup>も<sup>モ</sup>不<sup>ズ</sup>氣<sup>キ</sup>胞<sup>ポウ</sup>を<sup>ヲ</sup>張<sup>ハリ</sup>擴<sup>カク</sup>げ<sup>ゲ</sup>沈<sup>シヅ</sup>ん<sup>ン</sup>と<sup>ト</sup>す<sup>ス</sup>る<sup>ル</sup>不<sup>ズ</sup>體<sup>タイ</sup>  
體<sup>タイ</sup>と<sup>ト</sup>も<sup>モ</sup>不<sup>ズ</sup>氣<sup>キ</sup>胞<sup>ポウ</sup>を<sup>ヲ</sup>縮<sup>ヒキ</sup>窄<sup>サメ</sup>て<sup>テ</sup>自<sup>ジ</sup>由<sup>ユ</sup>自<sup>ジ</sup>在<sup>ザイ</sup>不<sup>ズ</sup>水<sup>ミヅ</sup>中<sup>ナカ</sup>に<sup>ニ</sup>浮<sup>ウ</sup>沈<sup>シヅ</sup>する<sup>ル</sup>



なりゆゑふあゝの氣胞も魚ハ水底ふのゝ在て水上へ  
浮出るとなりとつる魚。石首魚の氣胞と製して膠とす。石  
この魚ハニベ。蟲ハ魚の如き腮も氣胞もなきゆゑに別  
の名あり。小身旁小管竅ありてこゝを肺ハ代て氣息と出納が  
故小艸蟲の鳴ぶも小羽と揺しその體不比こハ聲の  
大なるものゆゑあゝのゆゑなる。馬ハ人ハ役使へし獸な  
る。肺臟殊大少して水ハ浮小便しく鬣ハ雨露日輝  
と遮る。尾ハ尾筒とつる。臆ありて船ハ舵ある  
う如く四足の蹄大うして水を爬ハ力を用らる。故  
小半身のうらら水ハ水上ハ浮出るやうハ造化の妙工と以

て生成する。獸ハ人ハ鞍上ハ跨て水とも涉らる  
づきものなる。然と唯外貌との。主とす。華靡なる  
風俗ハなりゆゑなる。此馬まぐとるの曠原ハあり  
て野草を生けづら。喰水と吞て生育する其天賦ハ任  
まをば。必健ハ力も却て勝る。さものゆゑも其  
體の肥臆て毛色の美ならんこととの。好て糠麥大  
豆など。と專小喫と日光雨雪と遮る。鬣ハ尾の臆  
でをとも切水を爬。産る。爪とも断去て盡くその天賦の  
本性と殺殘と。唯肺藏の氣胞の。彼ハ意  
さる。水上と行ことなる。唯胸の。水上ハ浮

出ろぐ故小乗人も鞍上小跨てこれと御ことかろふを  
止めとを得ず馬ふとらつて水と渉たるも甲冑  
具足して鏢鎗偃月刀火鉦など己得物と携ふるも  
高綱と梶原景季が馬上宇治川の先陣と争ふとも  
明智光俊が天津の圍敵と避んが為ふ湖水と馬  
ろく渉る唐崎の松の汀ふ着るも皆舊話小聴な  
るもやと馬ふとらつて渉るものもろく  
てあまを顧慮するも全く士の職に疎ぶものも今も  
北海より農民馬丁の輩中ても高波と馬上ろく渉

ゆくりをきけ然らばこの馬の養法の古昔小背自  
然小戻より馬の才能成盡しめざること嘆いふも  
てこそ古小復さんふとを庶幾より去寅歳の秋厩  
馬新論と刪補あまの評とを加刊行し専此事成  
辯論といたるも彼書と讀てそれ昔と自得し馬上  
ろく險阻を踰海河茂渉らるやうにして不虞の用小備  
べしと當世の急務たる也

食傷霍亂及一切の毒小中ある心得の事

食傷ハ切急小發病のやうなれども此時小喫する物直  
小停滞のこ小あらうでその以前と腸胃の消化あ

漸次小俗凝シロホリあるがその前日らその日小喫する物小牽サソビ  
望イダさきく發オモその十中の八九なり。此病ハ平常小その  
小なるものと養ヤシナヒて大なるものと忘ワスレる。飲食を貪ムソホる人小  
のこある病さきく武士さる人のその苦惱ナヤミ小羅カルを。大小恥ハジ  
づきあとなり。さきく外腠理ハダエと寒冷サムサの氣の為小壅塞トチフサ  
是内小逼迫拘急セマリヒキツリて腸胃ハラの運輸コナレを妨碍サマタグルより起強小過オホリアチ  
食小因コトぬものもあきどるれも平常攝生小意コホと注ツクる  
人よハさきくあきらめられ小しててもその病ハ慎ツツシメのよりの  
らぬ者小あることおりのべし。此證胸中實シヨウムチノウチツマリて息イキもたつら  
ぬやう小なり心下ミツオチへ苦迫サシコミて痛甚イロミチタシさハ食物シヤクモノの胃府小滯イブツク

て下降サガラぬゆきたつて。一次ハ吐劑ゲツを用ねばかたがは吐劑を  
種々あきく尋常ヒトコホリの醫師さる用意して蓄タムする者の  
少々さきく陣中たつてハ倉卒ミハカ小得エづきあきく  
あらん。然シカらる暑熱コホの頃さきく青蠅アラバイの頭と二三つ  
とらま播利ネリツクシて用スグ直小吐ツクをのたり。それ他茶の實ホカ苦ニカ  
瓢フツベノタテ穰ツツノシル及人糞汁ツツノシルも吐トを誘サツものたり。衆僧シユウソウの喫クするが  
人糞フツベノタテを解ゲするものあり。俱ク不潔ケツ物ハ食シは  
苦惱ガウと免メ日本ニッポンの僧ありて。吾ハ死シぬともう。不潔ケツ物ハ食シは  
用エハ毒蟲ドクチュウ愚ウも勇氣ユウキありて。我邦ワカ自然シゼンの天藥テンヤクさきく。の邦の  
人もあきく稱ホムす。す。蜀漆シヨクシツハ山野シヤノ小生ハる物モノより根ネと常山ジョウサンと  
書シす傳デンするなり。す。蜀漆シヨクシツハ山野シヤノ小生ハる物モノより根ネと常山ジョウサンと  
つひく船來フネライもあきく。の蜀漆シヨクシツの葉ハを採トリ生汁シヤクジツと榨シホて服モチす

ハ吐を催<sup>モヨブ</sup>根ハ殊<sup>コト</sup>ハ其効優<sup>カウ</sup>多<sup>シ</sup>。賣<sup>オウ</sup>藥<sup>ヤク</sup>の瘡<sup>キズ</sup>の截<sup>キリ</sup>藥<sup>ヤク</sup>ハ其の莖<sup>カサ</sup>葉<sup>エバ</sup>を  
根<sup>ネ</sup>と丸<sup>マ</sup>と<sup>ヲ</sup>用<sup>ヨウ</sup>ひ吐<sup>ト</sup>と翼<sup>アヒ</sup>朝<sup>アサ</sup>用<sup>ヨウ</sup>ひ吐<sup>ト</sup>と。また藜<sup>リ</sup>蘆<sup>ロ</sup>の根<sup>ネ</sup>も吐<sup>ト</sup>を催<sup>モヨブ</sup>ひ其の  
効<sup>カウ</sup>あり。又<sup>マタ</sup>吾<sup>ワ</sup>世<sup>セ</sup>葉<sup>エバ</sup>の生<sup>ナマ</sup>汁<sup>ジツ</sup>も吐<sup>ト</sup>を誘<sup>サソフ</sup>ひ其の効<sup>カウ</sup>あり。  
瓜<sup>ウリ</sup>蒂<sup>テイ</sup>ハ吐<sup>ト</sup>藥<sup>ヤク</sup>也<sup>ナリ</sup>。甜<sup>アマ</sup>瓜<sup>ウリ</sup>の蒂<sup>テイ</sup>も越<sup>ワカ</sup>前<sup>ノ</sup>の物<sup>モノ</sup>なり。越<sup>ワカ</sup>前<sup>ノ</sup>の物<sup>モノ</sup>なり。此<sup>コノ</sup>  
物<sup>モノ</sup>の莖<sup>カサ</sup>を切<sup>キ</sup>去<sup>ス</sup>く蒂<sup>テイ</sup>は細<sup>ホソ</sup>末<sup>マツ</sup>として二三<sup>ニ</sup>分<sup>ブ</sup>も用<sup>ヨウ</sup>ひ直<sup>チキ</sup>  
ふ吐<sup>ト</sup>を催<sup>モヨブ</sup>ひ。細<sup>ホソ</sup>末<sup>マツ</sup>にして久<sup>キウ</sup>きを經<sup>ツ</sup>ひ氣<sup>キ</sup>味<sup>ミ</sup>脱<sup>ダシ</sup>て効<sup>カウ</sup>薄<sup>ウス</sup>  
く是<sup>コノ</sup>バも一<sup>ヒト</sup>在<sup>ア</sup>陣<sup>ジン</sup>小<sup>コ</sup>と蓄<sup>タク</sup>んとし蜂蜜<sup>ミツバチ</sup>と火<sup>ヒ</sup>煮<sup>ニ</sup>た  
る小<sup>コ</sup>和<sup>ワ</sup>く煉<sup>レン</sup>藥<sup>ヤク</sup>の如<sup>ニ</sup>くして密<sup>キ</sup>器<sup>モウキ</sup>小<sup>コ</sup>容<sup>ヨウ</sup>て持<sup>テ</sup>ゆく一<sup>ヒト</sup>用<sup>ヨウ</sup>  
ると是<sup>コノ</sup>に和<sup>ワ</sup>く沸<sup>ニ</sup>湯<sup>ユ</sup>融<sup>ユク</sup>解<sup>ゲ</sup>て服<sup>ハク</sup>まぐ一<sup>ヒト</sup>和<sup>ワ</sup>蘭<sup>ラン</sup>より輸<sup>ユ</sup>と

ころの吐<sup>ト</sup>根<sup>ネ</sup>も能<sup>ヨク</sup>吐<sup>ト</sup>を催<sup>モヨブ</sup>ひ其の効<sup>カウ</sup>優<sup>カウ</sup>多<sup>シ</sup>。瓜<sup>ウリ</sup>蒂<sup>テイ</sup>は吐<sup>ト</sup>を催<sup>モヨブ</sup>ひ其の効<sup>カウ</sup>優<sup>カウ</sup>多<sup>シ</sup>。  
ハ代<sup>ダイ</sup>用<sup>ヨウ</sup>ひ。分量<sup>リヤウリヤウ</sup>ハ大<sup>オホ</sup>うた同<sup>ドウ</sup>程<sup>ケイ</sup>小<sup>コ</sup>用<sup>ヨウ</sup>ひ。一<sup>ヒト</sup>瓜<sup>ウリ</sup>蒂<sup>テイ</sup>は吐<sup>ト</sup>を催<sup>モヨブ</sup>ひ其の効<sup>カウ</sup>優<sup>カウ</sup>多<sup>シ</sup>。  
以前<sup>イゼン</sup>ハ吐<sup>ト</sup>血<sup>ケツ</sup>したる者<sup>モノ</sup>ハ吐<sup>ト</sup>劑<sup>ザイ</sup>を用<sup>ヨウ</sup>ひ吐<sup>ト</sup>を催<sup>モヨブ</sup>ひ其の効<sup>カウ</sup>優<sup>カウ</sup>多<sup>シ</sup>。禁<sup>イム</sup>ハ吐<sup>ト</sup>小<sup>コ</sup>由<sup>ユ</sup>て  
再<sup>マタ</sup>血<sup>ケツ</sup>を吐<sup>ト</sup>の怖<sup>オソシ</sup>あり快<sup>クワイ</sup>吐<sup>ト</sup>して多<sup>オホク</sup>くあつてハ前<sup>ゼン</sup>編<sup>ペン</sup>ハ  
出<sup>デ</sup>して緩<sup>クワン</sup>下<sup>ゲ</sup>劑<sup>ザイ</sup>を用<sup>ヨウ</sup>ひ吐<sup>ト</sup>を催<sup>モヨブ</sup>ひ其の効<sup>カウ</sup>優<sup>カウ</sup>多<sup>シ</sup>。劇<sup>ゲキ</sup>さる小<sup>コ</sup>ハ巴<sup>ハ</sup>豆<sup>トウ</sup>の  
入<sup>イ</sup>り紫<sup>シ</sup>圓<sup>エン</sup>備<sup>ヒ</sup>急<sup>キウ</sup>圓<sup>エン</sup>の類<sup>ルイ</sup>を用<sup>ヨウ</sup>ひ吐<sup>ト</sup>を催<sup>モヨブ</sup>ひ其の効<sup>カウ</sup>優<sup>カウ</sup>多<sup>シ</sup>。身<sup>ミ</sup>ハ自<sup>オノ</sup>然<sup>カラ</sup>なる生<sup>ウマ</sup>成<sup>ツキ</sup>の機<sup>カ</sup>關<sup>カン</sup>ハ病<sup>ヤメ</sup>毒<sup>ドク</sup>と排<sup>ハ</sup>洩<sup>セツ</sup>る作用<sup>ヤクウ</sup>  
カある故<sup>ユヘ</sup>小<sup>コ</sup>食<sup>シキ</sup>傷<sup>ヤウ</sup>は腹<sup>ハラ</sup>の痛<sup>イタム</sup>も吐<sup>ト</sup>を催<sup>モヨブ</sup>ひ其の効<sup>カウ</sup>優<sup>カウ</sup>多<sup>シ</sup>。瀉<sup>ラク</sup>下<sup>ゲ</sup>也<sup>ナリ</sup>。  
悉<sup>シツ</sup>皆<sup>ケ</sup>其<sup>コノ</sup>の作用<sup>ヤクウ</sup>カの人<sup>ニ</sup>身<sup>ミ</sup>ハ妨<sup>サマ</sup>害<sup>ガイ</sup>ある敗<sup>クハ</sup>壞<sup>クハ</sup>宿<sup>シュク</sup>物<sup>モノ</sup>と除<sup>ヘ</sup>去<sup>ク</sup>  
んとするは其<sup>コノ</sup>の作用<sup>ヤクウ</sup>カの人<sup>ニ</sup>身<sup>ミ</sup>ハ妨<sup>サマ</sup>害<sup>ガイ</sup>ある敗<sup>クハ</sup>壞<sup>クハ</sup>宿<sup>シュク</sup>物<sup>モノ</sup>と除<sup>ヘ</sup>去<sup>ク</sup>  
ん

證據シヨウコ 治療チリョウと施ホトスべき正メ鵠アゲとをそのものより一作用オウヤク  
カカの須スるところ小モト戻リて薬ヤクを處モチまば死イタスを致イタスおともあるが故コト小  
妄ノツ意イなるおとををわづらひ然シカまども此コ小コ其ミ吐ハんと欲オセご  
吐ハクことならず苦ツツ痛ツの甚シきもの成ス救ス得エずせんとしてその緊キ  
畧リョクと記シすたるを尋カ常トコの食シ傷ケ小コ生セイ熟ジュク湯トウと沸フ湯トウの  
中ナカへ水スイを各ハシ半ハ加カる鹽シホを少コ許カリ入イて嘔ウと指サして咽ノドとをふく  
探サガまば吐ハクを催モヨソたりこまへ嘔ウる度ホド小コをひいて水スイを加カる  
小コあらば必カナラ沸フらなる湯ユ小コ新シン汲キ水スイと等トウ分ブン小コ合カをさる  
ところ小コ吐ハクと誘サソ効キウあるなり小コの食シ傷ケの苦ク悶モン甚シく揮ヒ霍カク  
擦シ亂ランのものをさして霍カク亂ランとつるを霍カク亂ランハ食シ傷ケの病ビョウ證ショウ

一々食傷の外小霍亂とつる病のある少々あらず食  
傷霍亂の輕カこもの前ゼン篇ペン小載セを健ケン中チュウ散サン少コ可カをまじ  
こし霍亂と吐下甚く凶陽たるとは脈も微カ小  
絶タ人ジンとをるが如く腹中拘急四支厥冷卒小死ぬ  
る者ありこまへ四逆湯とつる劑クサリの正證セイショウなり人參ニンジンを加カ  
るを四逆加入人參湯とつる茯苓フクリヤウと人參ニンジンを加カるを茯苓  
苓四逆湯とつる吐逆を不止ヤミぬる小唐吳茱萸ゴシユユを加カ  
用ヨウふるなり證シヨウふより甘草乾姜湯カンザクカンキヤウタウともらひて  
こしあらず急イハカ卒ソクして薬ヤクを煎ケンする隙マをこし速スイヤカ小  
臍ホツの兩旁リヤウロウの天樞テンシュとつる灸キウをこしコシハ兩乳リョウチの

間と紙條コヨリをくくるとやうくと八つ折ハツオリ中ナカより二ツ小切コキレする  
正中ドウカを臍ハツへあて紙條の左右に端ハシ小點コテンをあてて天樞テン  
とつふ又を予オレが八華ハツの灸キツたゞ尤モトよりホトに圖ヅを出デし霍亂カクラン  
小ハ吐下アルの有キも無キも灸キツの効シルシあるもの多オホけは必速キツク小灸コキツ  
を灸キツと尤モトより陣中アツサより暑熱アツサの頃トキハ小の食傷シヤウ霍亂カクランハ  
必多オホクくぶくも預記得カチテコノロエく人を救スクべしまた烹飪ニケトコロの食物  
の中へ過アセマツく毒蟲ドウムシの入イる多オホクくを知らずして喰クフて毒小  
中ナカよりし。噴魚フクイの毒小中ナカよりするもまたハ砒霜ヒサツヨ礬石ゼキなどの  
毒と飲クミたられする小種コタマの毒を解ゲする劑クサリをあまじとじ  
皆油ミツを用ヨウる小優オホするはとたり予オレが試コトビする一人を葛カ

上亭長ウヘテイチャウの細末ホシマツ二錢許ニゼンコトナリと一次イチダ小服コボク一人を蕃木バンキ鼈子カメコの細  
末マツと四錢シゼンを服ノミする小此油コノアブと嚙クハとく速スミヤク小治コナリする  
あつとあり前マヘより小異草オモシクサの毒もくまをを用ヨウひたらむ必解カナラシ  
まづさたりやうと食物オウリモノの胃管イカン小滯トコホリて吐クハも下シタもたらぬ  
この小児コノコの過アセマツく錢ゼニを吞ノミあるが咽頭クハド小挂コタマく出デするも  
の染シメの咽ノド小星ホシく出デするもこれを用ヨウて出デしたる  
あつとあり。菘油ナタネアブ荏油アブラ麻油アマノアブ一切イチケツ拘カハルとらる小あらざる。一合許イチカフコトナリ  
も服ノミするも其毒オノドクと包攝ツクく害ガイと為ナサらむべ。錢ゼニ染シメたもの  
挂カケするもハ二三勺ニサンシヤウを用ヨウて足タまる予オレが用ヨウひする二人ニヒトの發キ  
狂人キヤウジンの自死ジシんとたぬへて服ノミする葛カ上亭長ウヘテイチャウを假令カトシ病ヤメあ

して些小一二釐を用ても、瞑眩をもとば必尿血の小便淋瀝シカチ  
るは惱あり。蕃木鼈子ハ周身麻木不仁證かどを發ハツせる  
そのたゞもど何れをの惱もなくして速スミヤカに解ゲしつゝ  
毒を包攝ヒツラムしつゝの効ありふ由なきをさしど程歴ホドヘく  
用てハその効なきをばよく得意べし。ひりある藩士カチウが  
蚰蜒グジクを烟管キセルの火皿ヒラうく打殺ウチコロシするゆゑその煙管キセルうく煙タ  
草クサを喫クく忽タチに死シするものありしと云々るものた往歲サキトシ  
牛籠ウシゴ箆司町シマうく鯢魚ササシの軒サシと胡椒豆油コセウシヤウユ小蘇ツケくつゝ  
を喫ク兩人フタヒトたりつゝ即死ツクシしつゝそのありしと云々るもの  
らば其物モノが相合アヒアフく猛厲マウリ至毒シドクと云々るとみえたり。それ

らふもこの油を用ゝるべし。必解カナラシクするものありしと云々るもの  
ちを故コトふらまはらふのこゝろを領知リョウチせしむるべし。慮オモハず人  
を救スクフふともあるものあり。此コノ小記シヨウキて衆人シユジン示シするもの  
傷寒シヤウカン時疫ジエキ癘疾レンシツ痢病リビョウと云々流行ハヤリ病心得ビョウココロの事  
傷寒シヤウカンといふも夏ナツみも冬フユも外ソトより寒ヒヤ冷ヤリの氣キも皮ヒ  
膚ダニを觸フ冒オカすして最初サイシヨに惡寒サマケ發熱チツかどあり病ヤムもの  
を輕重カウロウ不拘カハらず呼ヨソんで傷寒シヤウカンといふが往古ムカシの正名テイメイとしてあ  
りしなり。また疫病ヤクビョウといふは氣候キコウの變カハリり天地テンチの間マに一種シユ  
の戾氣アリキを生アずる多オホクく人ヒトの中ナカて病ビョウものを天行テンギョウとも時行ジギョウ  
とも温疫ウンエキとも時疫ジエキとも疫癘エキレンとも別ワケてつゝ全く後世ゴセの稱ナ

呼フよク往ム古キハ此コノ差別ニなく。一般ニ流行スするものをも指シて  
 寒疾ニとも傷寒ニともハいフたり。前ニありテ風ノ洞徹スぬ卑濕  
 の氣キ山中ノ瘴氣ハ衆人ニ羣居スの鬱蒸ス氣キなども。皆人ノ中  
 て病ニとシたりテそのハも多くシその中ノ壅閉ノ肅殺トころろ乃  
 寒氣ノ肌膚ノ昇陽ノ氣ヲ擁室シて起ル因ノも多くシ天地  
 間ノ戾氣ハも多くシ亦人ノ中ニも多くシこれハ外ニならず。故  
 小最初トも熱劇ク惡寒ノありテそのも一時假寐ノ感  
 冒カゼをもス綜スて呼フで傷寒トいフを正名トとスることナリ。  
 ころもを風トいフも風ト氣トハもトいフもハ滕理ヲ侵スるノ  
 ハ風ノ中ノ寒冷ノ氣ヲを以テたりシ。  
おのれがさき小著き  
歌傷寒論俗辯といふ

書小詳小記する  
 とスるニ榮花物語ハ風ノのハちと湯ノゆぎたりシと  
 ある腰コシ以下ヲを湯ニ浸メて汗ヲをトる半浴ハ法ト也。近年舶來  
 の氣味ハ薄ク桂枝トまたハ土佐桂トを用て小劑ハ  
 合トする。葛根湯ハ麻黄湯トを用てハ遼ハ優カ多シ。我邦上  
 古ノ遺法ハなりバ在陣中小汗ヲを發シんハハハ色ヲを用て  
 ね厚ク事足ルべシ。痢病ノ最初ト下利ト後重ト努力トあ  
 るものハも多くシの法ヲを用まス。金愈トも多くシその病勢ヲを緩ク  
 益ハありテ大盤ハ小鹽ト二三合ト容メ。その上ニ稻苞ヲを用けテおシ沸ト  
 ちたる湯ヲを汲リて用ふ。尤モその中ニ腰以下ヲとシく  
 温むル也。汗ヲを發シんハ熱稀粥ヲを用ても吸テ後



温覆ユリカワリて、ろく汗を發トルなり。發汗ツツカシ小ハ、柚皮香橙皮、回青橙皮、蜜柑皮、橘皮、接骨木、花浮萍などを煎ニユト用る。沸湯ニユ小清斯須ヒタシシラありて絞シホリて用るもよし。傷寒サイシヨの日を歴ヘて病ものを鑿ヤリ小藥を乞コラふをオモふとなれども、最初サイシヨの治法を疎放ヤリ小す。まば、輕カく重オモくする、そのなきを、表證ヘ小ハ、必先汗マととることを忘ワスルべからず。然シカ多を當世オランダイシマの和蘭鑿士サイシヨの治法を、小の傷寒サイシヨ、最初サイシヨの熱甚ツツきもの、熾盛熱サイキョウと呼ヨぶ。必發汗アヘ候コあるをも、顧カれ有餘イウヨと損ソをもると、つひて、絡ラクを刺サシて、大小血トを瀉トリ、蟻ヒル小血スと吸スをたぐ、て、妄意ミ小清涼下ゲ劑ザイとして、硝石シヨウセキ、霸王鹽ワウオン、孕礬ヨウバン、酒石シユセキ、木林度マリンド、酒石シヤリエン、瀉利鹽シヤリエンな

この類ルイを用ひ、自然作用オウゼン力の須モトとらる小背ノムキて、後日ゴニチの害ガイとならること多オコし、これ多あり、小穿鑿セン小をツツて、遂ツヒ小ハ、此過失アヤヲも起オコして、彼等カレラが治術ヂキョウ小此弊ツヒエ多きを顧カれ、天理リ小戾モト小のなきを、知チる窮理キウリくと、頻シキリ小稱トナフるハ、いと可笑オカシキことにもなる。左右トカク小小の和蘭オランダの狐キツ小魅惑バカる小の多オホき世の中ヨを、素人シロウトもよく回意クワエて、彼等カレラが為小治チを誤アヤらる。まとはり、ふん、假令カ彼が治法チホフの為小日ヒ百千ヒヤクセン人ヒトを治チり得エりとも、此コノ西戎セイジウの妖氣ヤウキが蔓延マンエンて、天下テンカの孽ノノとさる。これ、予が鑿ツツ破ハ等の書シヤも、カて之を排ハキするハ、遠く國家クニカの為小慮オモひ、然シカるを、死シやうる治法チホフの矛盾マヒツより人を損ソはる。多オホき世の中ヨを、顧カる人ヒトも、豈ナニ慨嘆カイタンし、ことなきを、傷寒カン、瘟疫エンを、て、熱ネツある病者ヤメを、一室ヒトツボ小多く置オクとき、小ハ、その吐出トシュを、ところの臭汚クサキ

氣と身體より蒸發とくろの厲氣が室中小充滿て病者ハ  
互タカヒ小ハキスヒまじりて出納ハキスヒするが故小病の解ゲをオソと遅オソるものなる  
らむアブキコト危険小赴ナルそのあまが假令病人多くとも二三  
を限カキリりて別室小別て卧フしむべしなまチドコロ居所をカキリ  
移ウツスを尤カシよりしす看護カンビヤウするものも空腹カラダよりカ旁小居ユルべし  
疲倦ツカレ多りとも其所小寝ネべし寒くとも病者の衣衾キレキヤカを  
着キルべし皆毒ドクを傳ウツスて輸ウツスふとあまカキをカキりてカキ嚴醋カキ  
を室イヘの四方ソウホウへソウキ濕シツくくユルキのユルキ文火小醋スを煮ニてその氣キは  
以モトて汚惡コモルトコロの氣と拂ハラふ小松脂マツノチヤシ瀝青シヨウセキ消石イワウ硫黄テウ鳥  
銃ホウの火藥タダを火小投イて薰モヤスし此等の病ハ人ヒトより

人小傳化易ハツリヤスさそのあまカキ傷寒ケツカン痢病リビョウなどの病者多アラ有  
ば大小便オウシヤウの臭氣ニホヒより毒を傳ウツスて患ワケラフものなるカキ別  
小建タツるものも病者ヤスの大小便オウシヤウと土中へ埋ウツる川へ捨スツる  
るもカキ病カキは失火テヤマチの燃初モエハジメハ火勢ヒヤキホヒ緩ユルヤカなるも  
ども五六軒シツも一時小燃モエあカキるやカキるも俄ニガ小消ケシが  
たさカキが如く熱ある病者ヤスも一兩輩カキのうらハ治ヤスし易ヤスく  
ど傳ウツリテ添ツク六七人小及カキべバ病毒シツも随ツクて劇ハジメくなるものカキからず  
そのうらハ危険ケンキヤク證シヨウ小赴オモムくものも多カキ故小カキりる  
病者ヤスあらバ疎誕サツタニ小をカキるカキるも最初小意サイシヨを注ツクて小  
まカキが處テアテ分カキをカキるカキるもまた瘡疾サウジツと痢病リビョウと病因イシハ同

さやう好まじし病の在<sup>ル</sup>ところを以て瘧疾ハ腸の患<sup>ハ</sup>く  
瘧疾ハ脾藏<sup>ハ</sup>の患<sup>ハ</sup>く故に瘧疾ハ四五發の後前小<sup>ハ</sup>吐<sup>ク</sup>  
劑<sup>ヲ</sup>を用ひて速<sup>ニ</sup>治<sup>ス</sup>るものありしに灌<sup>ル</sup>水<sup>ヲ</sup>もくも愈<sup>ル</sup>  
ことありし瘧の病者に問<sup>ハ</sup>バ大<sup>ニ</sup>椎<sup>ノ</sup>邊<sup>ニ</sup>より惡寒<sup>ノ</sup>發<sup>ト</sup>  
いつそあり六<sup>ニ</sup>七<sup>ノ</sup>椎<sup>ノ</sup>邊<sup>ニ</sup>より起<sup>リ</sup>たりもあり腰<sup>ノ</sup>膠<sup>ノ</sup>薦<sup>ノ</sup>骨<sup>ノ</sup>  
の邊<sup>ニ</sup>より發<sup>ト</sup>と答<sup>フ</sup>る者もありその惡寒<sup>ノ</sup>起<sup>ル</sup>ところを諾<sup>シ</sup>  
知<sup>ラ</sup>らば白<sup>キ</sup>芥<sup>子</sup>末<sup>ヲ</sup>小<sup>ニ</sup>飯<sup>糊</sup>と醋<sup>ヲ</sup>と交<sup>テ</sup>和<sup>シ</sup>調<sup>紙</sup>を徑<sup>守</sup>  
許<sup>ス</sup>丸<sup>ク</sup>切<sup>リ</sup>て攤<sup>テ</sup>その惡寒<sup>ノ</sup>發<sup>ル</sup>ところ小<sup>ニ</sup>貼<sup>ル</sup>お<sup>く</sup>  
るにさなきとさひのねなるをより其<sup>ノ</sup>處<sup>ニ</sup>小<sup>ニ</sup>熱<sup>ヲ</sup>を  
お<sup>く</sup>えり刺痛<sup>ヲ</sup>を發<sup>ル</sup>るより愈<sup>ス</sup>るものあり陣<sup>中</sup>少<sup>シ</sup>てハ

これもまじし試用<sup>ベシ</sup>瘧疾なるの後小<sup>ニ</sup>水<sup>腫</sup>となるものあり  
アもさなきとも陳<sup>中</sup>なるもの瘧<sup>疾</sup>濕<sup>ノ</sup>氣<sup>ハ</sup>中<sup>ニ</sup>るもの  
飲食<sup>ノ</sup>慎<sup>ム</sup>ありしより水<sup>腫</sup>を發<sup>ル</sup>るものあり末<sup>ニ</sup>  
小<sup>ニ</sup>記<sup>ス</sup>る三<sup>輪</sup>神<sup>庫</sup>の方<sup>ヲ</sup>と腫<sup>レ</sup>一切<sup>ノ</sup>膏<sup>梁</sup>粳<sup>米</sup>をも断<sup>テ</sup>  
鹽<sup>ヲ</sup>をも禁<sup>テ</sup>單<sup>ニ</sup>小<sup>ニ</sup>赤<sup>小</sup>豆<sup>ノ</sup>を喫<sup>ル</sup>れば不<sup>レ</sup>日<sup>ニ</sup>小<sup>ニ</sup>便<sup>快</sup>  
利<sup>ク</sup>治<sup>ス</sup>るものなり士<sup>人</sup>の此<sup>ノ</sup>等<sup>ノ</sup>事<sup>ヲ</sup>あま<sup>ニ</sup>意<sup>ヲ</sup>を注<sup>ス</sup>  
も亦<sup>モ</sup>忠<sup>孝</sup>の一端<sup>ヲ</sup>をま<sup>ニ</sup>くこれを領<sup>知</sup>お<sup>く</sup>こと  
なり

凍<sup>死</sup>と救<sup>フ</sup>并<sup>ニ</sup>小<sup>ニ</sup>寒<sup>地</sup>に在<sup>テ</sup>寒<sup>ヲ</sup>凌<sup>グ</sup>る心得<sup>ノ</sup>事<sup>拾遺</sup>  
北<sup>地</sup>蝦<sup>夷</sup>の地<sup>境</sup>へ踰<sup>ル</sup>寒<sup>氣</sup>小<sup>ニ</sup>堪<sup>ズ</sup>凍<sup>死</sup>たる者<sup>ノ</sup>治<sup>ト</sup>

施く効を得るまでハ呼吸絶耳目口鼻の機轉も絶つるが  
如くたるまで静ふべきを候小唇微く牽引する燭火  
と取て其面を照すと瞳子收縮燭火と遠ざければ再潤  
大て元の如くたるもの鳩尾と診へ指頭小微温を覺る  
もの鳥羽もしくハ燭光を以て口鼻小近づき鳥羽も  
しくハ燭光の微く動もの口を耳小寄る其名と呼バ面肉  
微く掣動その眼の左小あを右小あれ一眼ハ開き一眼  
ハ瞑その頬小をり微赤色を見その眉上の肉と指  
りて按バ陷凹なりちまを放りさハ漸小故小復もの此  
ハ候の中一二の應あるバ速小治と施る凍死たる者

を劫小温暖んとして火小近づけちまを温覆せざる  
と復るまで氣息も出るおと能たして遂小死ぬるものなり  
もと凍て四肢の強直なるを氣息の絶るハ酷寒收縮  
氣の為小呼吸の往来と壓止多るうう内藏小挂碍る  
が故小水小滿死多るそのとりし却る回復易しこれ  
を瘞むるはる前編よの庵るぶとく初小水を灌るりちま  
ハ雪塊もしくハ氷を取て手足より逆小肩背胸腹小至  
りちまを頻小摩擦して試る地を掘て頭面のことを出し  
項より頭後ちまを土小埋るまを前編ハ之ど吐地蝦  
夷の雪ある處までハ深雪の中へ全身を埋て唯面部の

を出しよくツキタテ蔡實ボラク頃之そのま置きオキ身體セハラカの柔軟オホシもたふ  
ものハ生氣オホシうまらば回復エドレなりこハ體中オホシ小些オホシ不存オホシする陽  
氣オホシの周身オホシを寒冽オホシささくオホシ壓力オホシ小對抗オホシて皮肉オホシの方オホシへ張出ん  
とオホシなるオホシ筋オホシをオホシまオホシばオホシ木の柔軟オホシなる候オホシあるものハ必オホシ甦オホシ生オホシをオホシん  
しと定オホシるオホシ後の治法オホシを施オホシすオホシりオホシうオホシくオホシ雪オホシに埋オホシんとオホシるオホシ前オホシ小先  
四支オホシより逆オホシ小肩背胸腹オホシと手掌オホシもオホシ摩擦オホシ關節オホシ毎オホシ小揉軟  
て後オホシ小くオホシなるオホシまオホシとオホシ尤オホシりオホシまた氷オホシの下オホシの寒水オホシを汲オホシて  
頭上オホシより身體オホシへ多くオホシ灌オホシうオホシくオホシるオホシうオホシまオホシてオホシハ盤オホシ小寒水オホシを汲入  
く浸オホシもオホシしオホシ坐オホシらオホシをオホシて浸オホシぐ可オホシけオホシきオホシともオホシハ盤オホシ浅オホシくオホシしオホシく  
肩オホシあオホシらオホシばオホシ頭オホシの方オホシと高くオホシしオホシて頭面オホシと水オホシの上オホシへ出オホシさ

と仰オホシ小用オホシさオホシるオホシがオホシよりオホシしオホシづオホシれオホシるオホシも頭上オホシハ別オホシ小水オホシをオホシをオホシりオホシく  
灌オホシうオホシくオホシるオホシ素問オホシ五常政大論オホシハ氣寒氣涼治オホシ以寒涼オホシ行水浸オホシ之オホシとある  
體冷風オホシを惡オホシしオホシと甚オホシしオホシきオホシものオホシをオホシくオホシ小オホシかオホシくオホシしオホシて生氣オホシや回復オホシと  
用オホシてオホシ効オホシを得オホシるオホシ出オホシるオホシまオホシとオホシ多オホシしオホシ候オホシあらオホシば雪中オホシ若オホシくハ盤オホシより曳出オホシし坐オホシをオホシおオホシよオホシて關  
泉戸オホシの水オホシうオホシても巖頭オホシより漲出オホシる水オホシうオホシてもやオホシ暖オホシうオホシて  
水蒸氣オホシの發オホシをオホシ汲オホシきて頭上オホシ肩背オホシより周身オホシへ多くオホシ灌  
うオホシけオホシらオホシうオホシ關節オホシを揉オホシ和オホシげオホシて後オホシうオホシくオホシ濕氣オホシを拭オホシとりオホシく  
後新淨衣オホシと厚オホシく着オホシて稻藁オホシもオホシしオホシくハ藁薦オホシを厚オホシく累敷オホシ  
てオホシその上オホシへ右オホシと下オホシりオホシて卧オホシをオホシ上オホシよりオホシも柔オホシなるオホシ藁薦オホシハ綿  
厚オホシき衣衾オホシを多オホシく被オホシて頭上オホシへも衣服オホシやうオホシのものを覆オホシ唯

口鼻のくたし出さずとく<sup>子</sup>閉じし<sup>下</sup>。初水の下の寒水とみより少く暖みある水を灌漑。  
小温めん為なるを<sup>ホリタキ</sup>開泉戸のなき處。うくしてもなる<sup>テ</sup>四支の  
末より<sup>カタセガ</sup>肩背ふのころやでを<sup>サシ</sup>逆小摩擦後小舌交薬と  
鼻へ吹らしむ<sup>クサメ</sup>。舌交薬のそとハ前篇より。皂莢細辛の類も。嚏薬  
や、回復ともとみえても。呼吸の往来微なるうらふら。  
うたならび内服劑を用べうらび息出で舌のや動と診て  
後小四逆湯を用るうらうら<sup>イキ</sup>。一次小多く與んより  
頻々小些少つ服をうらうら<sup>今此小述</sup>る療法と前  
篇小盤點をうらうらと行ところの旨と預了解を。  
よく雪吹ふ逢て死ぬもの必酒と喫その酒氣小凍せく行んとなる  
ものありとよりうらうら<sup>ハ寒氣</sup>烈さゆるる<sup>ハ</sup>腫理閉塞く酒氣發泄す

い内蔵小迫る<sup>コ</sup>精神昏胃やぐ<sup>キ</sup>氣息も絶るやうなるあり。蝦夷地  
方へゆきてハ<sup>コ</sup>うらうら<sup>キ</sup>もまた多うらうら<sup>キ</sup>。ハ<sup>コ</sup>うらうら<sup>キ</sup>の<sup>キ</sup>樹木を  
あまを救ま<sup>キ</sup>。因ふつふべきむあり。蝦夷地の寒地小在て冬  
を凌んとる<sup>ハ</sup>先村里小す<sup>コ</sup>地を撰南方とあなて  
東より北西へ廻らして堤を築立繁茂べき樹木を多  
く植て寒風の往来を遮る。北地ハ造化の妙巧を。  
質軟脆してよく火小堪る石ハ必生ざるものなり。既  
小下毛の鹿沼宇都宮などあまら多くありて此石を以  
て壁小代て庫と築家と造らるハ瓦の代も用る也。蝦  
夷の地ハ必<sup>コ</sup>うらうら<sup>キ</sup>と生<sup>ト</sup>る處多くあざる<sup>コ</sup>。之を  
得バ此石を以て床下を築立るの上へ材木を以て屋と

建<sup>タテ</sup>た<sup>ル</sup>ち<sup>た</sup>ハ此石の<sup>ミ</sup>小<sup>て</sup>屋と造<sup>ツ</sup>り<sup>し</sup>て床下<sup>ノ</sup>の後面<sup>ニ</sup>  
ら<sup>ち</sup>う<sup>ち</sup>う<sup>ち</sup>左右の<sup>う</sup>ち<sup>ら</sup>小<sup>氣</sup>の往<sup>カ</sup>来<sup>ヨウ</sup>や<sup>う</sup>小<sup>小</sup>き<sup>き</sup>穴<sup>と</sup>穿<sup>ア</sup>け<sup>テ</sup>  
申<sup>コ</sup>刺<sup>ク</sup>ら<sup>う</sup>ら<sup>り</sup>あ<sup>の</sup>床下<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>薪<sup>ヲ</sup>を多<sup>ク</sup>入<sup>テ</sup>火<sup>ヲ</sup>を燃<sup>キ</sup>て  
後<sup>ニ</sup>銅板<sup>ト</sup>も<sup>し</sup>くハ石蓋<sup>ト</sup>を以<sup>テ</sup>其口<sup>ヲ</sup>を覆<sup>フ</sup>ヒ室中<sup>ヲ</sup>を温<sup>ム</sup>ら<sup>う</sup>  
し<sup>じ</sup>ひ<sup>バ</sup>い<sup>に</sup>た<sup>る</sup>る<sup>る</sup>嚴寒<sup>ヲ</sup>を<sup>も</sup>凌<sup>グ</sup>ぶ<sup>を</sup>ち<sup>か</sup>る<sup>る</sup>浴<sup>ヲ</sup>し<sup>ら</sup>う<sup>ハ</sup>  
必<sup>ズ</sup>蒸桶湯<sup>ヲ</sup>を用<sup>ヒ</sup>浴後<sup>ハ</sup>必<sup>ズ</sup>水<sup>ヲ</sup>を灌<sup>テ</sup>腠理<sup>ヲ</sup>を固<sup>ク</sup>密<sup>シ</sup>ル<sup>衣</sup>  
服<sup>ハ</sup>小<sup>ハ</sup>毛<sup>ア</sup>る<sup>革</sup>と<sup>以</sup>て外<sup>ハ</sup>帔<sup>ヲ</sup>を造<sup>テ</sup>着<sup>ベ</sup>し酒<sup>ヲ</sup>を多<sup>ク</sup>飲<sup>ム</sup>  
べ<sup>が</sup>ら<sup>ず</sup>醒<sup>マ</sup>る<sup>後</sup>小<sup>ハ</sup>之<sup>ヲ</sup>つ<sup>て</sup>寒<sup>ヲ</sup>を増<sup>ヨ</sup>多<sup>ク</sup>小<sup>ハ</sup>なる<sup>に</sup>け<sup>嗽</sup>  
ぬ<sup>ら</sup>ず<sup>寒</sup>を凌<sup>グ</sup>んと<sup>て</sup>炭火<sup>ヲ</sup>を多<sup>ク</sup>室中<sup>ニ</sup>置<sup>キ</sup>こと<sup>ハ</sup>宜<sup>シ</sup>  
ら<sup>ず</sup>炭蒸氣<sup>ノ</sup>小<sup>中</sup>で<sup>昏</sup>冒<sup>失</sup>氣<sup>ノ</sup>と<sup>ア</sup>り<sup>ら</sup>う<sup>も</sup>小<sup>ハ</sup>速<sup>ク</sup>

舌交<sup>ク</sup>藥<sup>ヲ</sup>を用<sup>テ</sup>嘔<sup>ヲ</sup>を<sup>さ</sup>す<sup>る</sup>也<sup>一</sup>其<sup>ハ</sup>前<sup>ハ</sup>小<sup>ハ</sup>吐<sup>劑</sup>を用<sup>テ</sup>  
て<sup>黒</sup>色<sup>ヲ</sup>有<sup>ル</sup>惡<sup>臭</sup>あ<sup>る</sup>汚<sup>物</sup>を吐<sup>キ</sup>し<sup>じ</sup>ひ<sup>バ</sup>い<sup>に</sup>た<sup>る</sup>る<sup>る</sup>回復<sup>ヲ</sup>も<sup>た</sup>ら<sup>ず</sup>  
何<sup>ノ</sup>の病<sup>ハ</sup>も<sup>輕</sup>く吐<sup>を</sup>と<sup>ら</sup>んと欲<sup>ス</sup>小<sup>ハ</sup>鳥<sup>ノ</sup>羽<sup>ノ</sup>油<sup>ヲ</sup>を浸<sup>テ</sup>  
咽<sup>中</sup>を探<sup>バ</sup>ら<sup>う</sup>も<sup>吐</sup>の<sup>ち</sup>り<sup>ま</sup>く<sup>迅</sup>雷<sup>ノ</sup>小<sup>擊</sup>れ<sup>レ</sup>  
て<sup>即</sup>死<sup>ス</sup>ら<sup>う</sup>も<sup>此</sup>小<sup>ハ</sup>凍<sup>溺</sup>死<sup>ノ</sup>療<sup>法</sup>の意<sup>ヲ</sup>を用<sup>ク</sup>  
救<sup>フ</sup>ら<sup>う</sup>も<sup>雷</sup>擊<sup>ヲ</sup>を土中<sup>ニ</sup>小<sup>埋</sup>三<sup>時</sup>を歴<sup>ク</sup>蘇<sup>生</sup>し<sup>と</sup>  
る<sup>も</sup>の<sup>モ</sup>一<sup>夜</sup>あ<sup>さ</sup>て<sup>氣</sup>息<sup>ノ</sup>の出<sup>た</sup>る<sup>も</sup>の<sup>モ</sup>あ<sup>り</sup>し<sup>な</sup>り<sup>。</sup>  
又<sup>乳</sup>兒<sup>ノ</sup>母<sup>ノ</sup>為<sup>ニ</sup>小<sup>壓</sup>死<sup>ス</sup>る<sup>を</sup>糞<sup>壤</sup>中<sup>ニ</sup>埋<sup>テ</sup>蘇<sup>息</sup>  
た<sup>る</sup>も<sup>の</sup>あ<sup>り</sup>ま<sup>く</sup>往<sup>歲</sup>傷<sup>寒</sup>病<sup>者</sup>ノ卒<sup>ス</sup>小<sup>死</sup>る<sup>を</sup>葬<sup>ス</sup>  
地<sup>ニ</sup>小<sup>埋</sup>ら<sup>う</sup>も<sup>の</sup>夜<sup>中</sup>小<sup>ハ</sup>つ<sup>ら</sup>り<sup>て</sup>甦<sup>生</sup>自<sup>穴</sup>を<sup>出</sup>る<sup>家</sup>小<sup>ハ</sup>

歸カヘリ一者ありしときたり。或ハ葬ハカシヨ穴より聲コエを揚アゲて人を呼ヨビ掘ホリ出デさるる者もあらずしよしを聞キり。至キテら生キ氣キ少セりて生セ氣キ回カ復ヘリしなり。葬ハカシハ博ハク情ジヨウの至キ極クなり。生キ氣キハ音ハ子シを能ヨク領ガ解テし。何ナニの事コト故ケレも知シら。卒ソツ死シし者モノを救スクこしあるべきなり。卒ソツ死シ者モノを温フ湯ロウ中チウ小ソウ摩マ擦スリして甦イキ生カヘラせしむる一ツ法ホフあり。初ハツハ温ヌル敷マユ湯ユを用ヨウて徐ダシク々ク小ソウ湯トウを熱アツクして四テ支シ胸ムネ背セを逆サカシマ小ソウ末マエのうたより摩マ擦スリて後カダ肩カ井イと指サシ頭カビ小ソウ摺ツカミう。尤トモ頭カビ上ウヘへも湯ユをうけさせ。うら項ウラシを揉モミ和ハフけて後カダ肩カの肉ニクを捏ヒキぐり。嘗カツて小ソウ兒ニの

樓上ニカより倒サカシマ小ソウ落オチて頭カビを打ツて即ソツ死シし。水を少ソウくその頭カビを拊ツツきて後カダ肩カ井イを摺ツカミて回ユミ復ガヘラし。め。おともありし。往サキニ時トキ或ナラバ人ヒト小ソウ兒ニの瘧ヒキツメ瘳ソクシて卒ソツ死シし。前マエの温ヌル敷マユ湯ユ中チウ小ソウ摩マ擦スリて救スクたるものありし。偶タダ此コノ術ジュツを知シて行ユクひし。そのとみえ。と。

溺死を救心得の事 拾遺

前編オボシ小ソウ溺シ死者シヤを救スク小ソウ先サキ水ミヅを吐ハクき。ことをつる。夥オホシく水ミヅを嚥ノムて胸ムネ腹ハラ膨ハレ張レ多オホシく。その小ソウ行ユクふ。おとにて水ミヅを嚥ノムおと少ソウきし。め。小ソウ強ツヨク小ソウ為ナシお。お。お。水ミヅを多オホシく嚥ノム



さるものにはその術を行らんも。卒暴ふらまを牽扯ヒキマヌと  
なぐつゝも敬ツシム細心チンシン小所置安トリアノカセニタリ小頭部を倒下て擡舉モミアゲ  
るあとなどをぶつらば頭面胸背を壓撞オシツケせし物小觸地チ  
小墜オトシおどして損傷ツチヒキツケルあどなどありて却カヘツて自蘊生オノトソセイをぶき  
そのも救スクハむざる小つららむることあれざるよくあれを  
慎ツシムべし故小胸腹胃部をよく診察ツカハシてさきで蓄水タマリヅをさ  
ものも初ハジメより頭の方を高くし右側ミキフタニ臥フシをて四支テアシより遡サガリ  
て胸腹チウフを摩擦ササリ手巾二三條を疊カサチタミ摺アツキユて熱湯ヒタシに浸ヒタシせしむ  
身體諸部カラダノナニユチを摩擦ササリをぐら温ハカ罨スもいづまも前編マエヒ小  
つらぶとく口中の土砂チヤチヤを丁寧チンジン小拭取チグて後強人チカキヤヒをして

息イキを吹入フキイさゆるるらうらうらイ膏コウ膏コウを以て徐シヅカ小風氣コウキを口内小  
嘘容ウソイるウソイ陣中チンチュウの鍛冶カガをたれハカ鎗シヤウの折損セツソたる物を鍊カキ劍ケン  
ゆゑのイ膏コウ膏コウ陣中チンチュウ必カナラありて軍勢イクシの多少オホシヤホシ小隊コウダイで劍ケン匠シヤウ數輩スウハヒを將シヤウ  
今イマの世ヨの劍客ケンカクの如ゴトシ唯敵タテの刀タチの心を奪ウバりて己ミと守モリることを忘ワスレ劍ケン  
術ジュツ必カナラ刀タチを以て刀タチを防マカるものなり相擊サウキキを以て脊力セキリキを競カキ競カキ智チ雅ヤ  
謀ボウの詐騙サツパンを以て勝カチを求モトむる闘トウ闘トウ小異コヒことなきが如ゴトシくしていづれも  
名劍ナケン利リ刀タチをもちも倭ヤマト捕ツ蓋カサ幕マクの如ゴトシくたりて敵タテを刺サシ斫チグことハ為ナシぐこと  
るイ劍術ケンジュツの必カナラ詭ケイて勝カチるのたれハ人ヒトの卑ヒナ見ミること多オホシく拙チヂ陋ロウたるものなり  
なりゆゑゆゑ云クモの畜生クシヤウ兵法ヘイポウと非ヒ謗バウたりしも實マコト小其理コノコトありし  
なり。此コノ溺死者ニョクシヤとつども初ハジメより卒ソク小温過コノヒヤカして却カヘツる  
救スクハがたなき能スベキその旨オモフを思惟オモフべし服藥フクヤク鑿イシ士シの預アツカルところ  
なりども前マエ小霍亂カクランの吐瀉トシヤ甚シし陽死オトロヘテシナんたるもの  
も此凍溺死コウニョクシの陽氣ヤウキ回復キカヘツ遲鈍者チヂンシヤをあまを療チヤウむることを

るの趣オモキハ同オモキふとオモキなるオモキ是オモキバ内服劑オモキハ四逆湯オモキの輩オモキを用オモキてオモキよりオモキ且オモキ  
呼吸イキ出イキるイキとイキしイキどもイキ耳目四肢イキの機轉イキ劣弱イキしてイキ生氣イキの續イキ  
うイキとイキくイキとイキゆるイキものイキハ前イキふイキりイキハ天樞イキの灸イキ及イキハ花イキの灸イキをイキ  
を行イキてイキよりイキくイキもイキどもイキ妄意イキハ火イキをイキ多くイキ室中イキハ置イキてイキ大氣イキ  
の鬱塞イキぬイキやイキふイキまイキるイキことイキをイキ忘失イキことイキとイキたイキりイキまイキすイキ。

金刃傷を治する心得の事 拾遺

金刃傷キリキズの大キリキズなるキリキズものキリキズふキリキズりキリキズてキリキズハ外科キリキズの職キリキズとしてキリキズ素キリキズ  
人の行キリキズぐキリキズことキリキズをキリキズまキリキズすキリキズハ士人キリキズのキリキズ前編キリキズハ記キリキズするキリキズことキリキズをキリキズ留キリキズ  
意キリキズてキリキズ大槩キリキズハ事キリキズ足キリキズぬキリキズべキリキズしキリキズ金創キリキズを療キリキズむキリキズるキリキズはキリキズ忍キリキズ耐キリキズ飲食キリキズを  
減温熱膏梁物キリキズを喫キリキズむキリキズ酒キリキズを吞キリキズむキリキズことキリキズをキリキズ嚴禁キリキズべキリキズしキリキズ焼酒キリキズを

大なる金創キリキズを洗キリキズふキリキズハ痛強キリキズしキリキズ堪キリキズぐキリキズことキリキズもキリキズどキリキズ血キリキズを止キリキズ  
る効キリキズふキリキズさキリキズふキリキズあらキリキズはキリキズ絲キリキズハ輕キリキズきキリキズ創傷キリキズハ綿布キリキズと燒酒キリキズに蘸キリキズ  
くキリキズあキリキズまキリキズしキリキズ蓋縛布キリキズしキリキズすキリキズもキリキズまキリキズすキリキズことキリキズよりキリキズあキリキズまキリキズしキリキズ此キリキズ少キリキズの疵キリキズハ  
ても汚物土砂キリキズなどの類キリキズハ細心キリキズハ小意キリキズを用キリキズて採去キリキズねキリキズばキリキズふ  
らキリキズずキリキズ膿キリキズを醸キリキズて愈キリキズるキリキズことキリキズ遅キリキズまキリキズすキリキズハ必キリキズずキリキズくキリキズ洗キリキズおキリキズくキリキズてキリキズその  
あキリキズとキリキズを乾巾キリキズあキリキズらキリキズうキリキズくキリキズ拭キリキズて後キリキズハ纏縛キリキズをキリキズすキリキズべキリキズしキリキズ武家故實キリキズ百  
箇條キリキズハ出キリキズとキリキズるキリキズ箭鏃キリキズ拔キリキズの方キリキズハ名キリキズあるキリキズ藥キリキズふキリキズてキリキズハあキリキズまキリキズしキリキズ予  
ハ試キリキズみるキリキズことキリキズもキリキズなキリキズらキリキズれキリキズどキリキズ蟾蜍キリキズの箭鏃キリキズを出キリキズとキリキズるキリキズことキリキズハあキリキズまキリキズしキリキズ  
を賞キリキズむキリキズるキリキズ人衆キリキズをキリキズまキリキズすキリキズ末キリキズハ記キリキズするキリキズことキリキズをキリキズ看キリキズべキリキズしキリキズ此方キリキズハ銃丸キリキズ  
と出キリキズとキリキズふキリキズもキリキズまキリキズすキリキズ用キリキズべキリキズしキリキズ漢土キリキズの箭鏃キリキズを出キリキズとキリキズるキリキズ方キリキズハあキリキズまキリキズしキリキズ物

と用ゝるは、そのまゝも其處小記多きを参考べし。伊勢 平蔵

云ある弓術の書、弓の煉と云ふことと、のる煉と、初學の時、わが方  
小勝する弓を引る、吾カうて自由引るる、の相應の弓を引て手  
前を正しく射習と云ふ、なるとも、吾カよ勝する弓を引るとも、吾身ハ弓  
引を正しくして、弓ハ吾身を引るる、剛弓と吾ハ引んとおもへども、弓  
剛さゆゑ、弓ハ引ると齒を噬むる、胸より上へ、蕩憚つたり、腹部より  
下、脚の關節は、浮立、腰弱く、左右の腕ハ、屈く伸ぶ息を上へ、喘  
あがて、胸中甚苦く、腕振へて、吾ハ弓を引持んと、その間、弓のちよりの離  
んと、故ふ力及ぶ心不任と、放ゆゑ、正鵠大違、そのなり、弓のゆるく  
の癖ハ、剛弓ハ引立ると、弓ハひく手前、離るる、調さるる、なり、その  
の癖出る、なり、初學の人ハ、剛弓とて、矢のゆるく、捷利と、遠く飛べしと  
おもひて、剛弓と好む、剛弓とて、吾カ弓ハ、引立ると、唯、弓の力、ゆるくと、離  
ゆるく、ゆるく、勢弱と、遠く、中途、落ちて、のる、吾カハ、相應と、離  
自由に引る、ゆるくと、射、吾カ、我力と、弓の力と、相和、合、手前、離るる、調ゆる  
惣身の力、弓ハ、入て、箭の勢も、鋭く、遠く、不届、射、招も、違、近、由、三、三、間、堂、の  
通矢を、目的、射、弟子、小教、師、匠、皆、弟子、小、剛、弓、を、引、る、事、と、  
弓の力、射、堂、を、達、人と、欲、故、た、常、小、剛、弓、と、好、一、生、間、手、前、習、調、ら  
る、射、術、成就、を、も、こ、こ、な、り、や、と、通、天、軍、用、な、る、を、矢、數、を、射、増、る、名、を  
る、の、こ、こ、無、益、な、る、伎、と、観、戦、場、の、類、な、り、の、通、矢、ハ、三、三、三、間、の、様

を射徹する、の堂ハ、二間と、一、間、射、て、柱、を、建、つ、六、六、六、間、を、り、戦、場、を、り、  
六十六間射と、や、其、矢、が、甲、冑、を、貫、く、能、く、戦、場、を、り、敵、を、  
七八間近づけ、射る法、なり、近、け、甲、冑、を、貫、く、事、を、り、通、矢、小、用、る  
弓ハ、内、の、竹、ハ、堅、く、剛、と、竹、を、厚、く、少、焼、く、貼、外、の、竹、ハ、柔、く、弱、く、竹、を、薄、く  
して、貼、る、と、巧、機、を、為、す、物、を、り、不、届、の、如、く、な、る、矢、ハ、  
戦、場、ハ、用、ら、る、と、一、書、夜、小、一、萬、幾、千、の、矢、數、も、無、用、な、り、戦、場、を、り、  
終、日、終、夜、天、軍、を、り、る、の、ゆゑ、通、矢、の、射、者、ハ、布、を、腹、と、茶、  
粥、を、嚙、藥、を、服、射、る、と、つ、ふ、る、柔、弱、な、る、と、戦、場、の、用、ハ、去、  
つ、る、と、古、人、ハ、矢、數、を、射、増、く、天、下、一、の、名、を、と、り、戦、場、の、用、ハ、  
づ、る、と、古、人、ハ、遊、藝、ハ、同、と、あ、て、看、者、の、目、を、慰、ま、く、人、の、耳、を、驚、す、の、  
ミ、畢、竟、ハ、名、を、賣、求、る、事、で、の、こ、と、實、の、武、藝、ハ、真、實、  
と、ま、を、學、と、ま、ふ、錢、炮、を、り、も、捷、便、と、軍、用、小、利、多、と、の、ち、ま、真、實、  
の、稽、古、を、り、る、と、ま、を、り、近、世、射、術、を、教、る、人、も、學、ぶ、の、も、通、矢、を、目、的、  
と、し、修、行、を、り、る、と、ま、を、り、來、り、る、の、通、矢、ハ、射、術、の、異、端、を、り、心、あ、ら、ん、武  
士、ハ、決、して、通、矢、を、望、ま、る、と、る、と、予、の、小、弓、箭、ハ、我、邦、太、古、より、用、る、と、る、  
と、歩、數、を、以、て、天、神、の、御、子、な、る、と、示、す、と、觀、て、も、世、を、治、る、武  
用、第、一、の、物、な、る、と、知、ま、る、と、殊、小、兵、又、相、接、の、時、小、弓、箭、の、利、ハ、鳥、銃、ハ、  
優、と、あ、ら、ん、況、や、劍、首、銃、の、如、き、鈍、器、の、後、卒、士、兵、の、為、と、る、を、學、ハ、恐、く、我  
小、裨、益、少、と、り、且、武、士、を、稱、し、と、弓、箭、の、家、と、り、る、の、伊、勢、氏、の、説

のごく、眞實の射術を専ら研究し、その力をより、刀劍も強小長大なるを好ぶるが、己が力に應じざるものを用ふ、力必疲く、おのれ敗を恐るることあり、近頃世に流行る長竹刀の習演も、實用小銃の方、是も試銃の異端なるを、

銃創と療むる心得の事

前編小火傷毒煙等の事より、銃炮の丸を出し、ことごとくを論て、銃創を療むるの議と詳言する、此よりして、門の外科の預むる事、少く、士人のうゝ為得べきもの、あらざれば、あり、予まで、軍を分て、他方小向ひ、鑿士の従事、で、ふつとらぬ、ふともある、ぐ、とは、再此に、その梗概を述て、士人の意得と為んと、まゝ、は、銃創の治法、小三等の異なる、ある、一、丸を出して、その創を洗ひ、金創の治法、の、

く、ふして、治を、く、さ、もの、と、一、ハ、截開術、さて、創口を、截開て、肉中を、掃除、を、し、便宜を得と、む、と、一、ハ、切断術、と、創を受、む、と、ころの、手、小、あ、と、足、小、あ、れ、利、刀、を、以、て、さ、ま、を、切、断、て、不、具、の、人、と、な、り、唯、生、命、を、保、續、し、む、る、の、止、こ、と、を、得、ど、し、て、行、と、ころ、の、術、と、な、る、丸、を、出、し、て、後、金、創、治、法、小、從、こ、と、一、ハ、前、篇、既、小、述、ぶ、る、を、つ、つ、と、此、小、後、の、治、術、の、槩、畧、を、合、論、む、と、雖、切、断、の、伎、小、つ、り、て、血、肉、の、敗、壞、ら、む、死、を、致、さ、ん、こ、と、を、怖、て、行、と、ころ、な、れ、ど、も、治、を、施、者、を、こ、と、ま、つ、と、受、る、者、も、俱、小、勇、英、果、断、の、識、ある、ふ、あ、ら、は、ま、バ、行、難、さ、術、な、ま、バ、不、ま、ま、で、い、つ、を、

まづていゝる術小つりてハ、額門の外科とゞども、まづて  
巧手コウシヤ小あらね能為得べコウナレらざるあたらなり。頭額及胸  
腹等の内藏を銃丸小貫ツラマカまツラマカつてそのハ即死ソクシをるが故に。  
治術の施シべさシふともちなるまで。胸部も幸サイハヒふサイハヒて心肺二  
藏小中ツカらツカず。堅横の隔膜をも破ヤブを腹部も至要の部小  
中らざるものハ治術を施ホトコて愈イユるものもあまごもるれら  
もまオロ俗人の容易小手を下オロさオロるものふオロあらね故  
ふあハズキく省て言イハぶイハるなり。此ハズキもハズキて士人の領知コノロヒく  
自利ジリ他タハ洪益コウイキあることハズキを簡易小記カンイコキおくハズキまハズキでなり。  
鐵炮テウポウの震蕩の餘響ありて。即死ソクシをさる部小中と

雖動イハも頭眩昏冒振戦メクレンキカウトリナリ熱嘔吐下利チツヨクムカヒテハラクダリなどの證を發ハツ  
甚コハ精神擾亂コノロ謔言妄語ミダレハ人事コノロヒと省カヘリざるイハ至者イハ  
あまハズキハ内科醫もハズキ預イハことハズキあハズキらハズキすハズキ銃  
創キズハ金キリ及傷キズの如く初ハ痛甚イハらハズキずハズキ動脈の大なる  
ものを損傷ツコナフするハズキ金キリ及傷キズの如く多く出血ハズキする  
ことハズキもハズキなりハズキ憎ニクムぶハズキ我狄の碎鐵破陶サイシキタチセトシヨシを火藥に  
混マシて敵を惱オヤしハズキる。火瓶火櫃ヘイキのごとハズキハその碎鐵破陶  
かハズキじハズキ肉中ハズキふ入ハズキて害ガイとハズキなるものハズキと吾着キるハズキ鎧ヨロヒの摧及クサゲト  
衣服キルモノの粉裂コマカニケをハズキ鐵丸メダマとハズキ皮肉の中ハズキへ入ハズキるハ  
創口ソウコウの狭小セマキとハズキりハ出ハズキるハズキ不得止創ゼヒテアラ

口を割て肥出カキとあらぬが治ホドレを施セツぐと故セツに截開術カキを用るなり。近カキく割カキりあるものハ、カキを割カキも  
おぼろぎ、唧筒カキを以て洗ても衣服の裂カキつるは出るたも、カキ  
破陶セト碎鐵モリ丸カキの類ハ、鑷子ケヒキ鐵篋ヲウベラ及前編ツ小圖ツを出し、  
雙鈎タ鉀子カキ、鷲嘴クマ鑷子マなどの類を以て出さく指頭ニヒを容イ  
らざるが指カキして搔出カキして後小水カキとくハ水小愈創水カキ  
を加ふるものを以てを洗カキて後末小出カキする防腐水カキ  
又ハ愈創水の類を棉撒絲モツシ小蘸ヒメシくを納カキその他ホカ金  
創カキの治法シメカフ小従シメカフより、截開キリヒラハ外科カキハ種サマ々の器械ダウあ  
とども、俗家カキより倉卒ニハカのさきにハ、剃頭カミ刀カミ又ハ小柄コウの類を

用てもより、カキと銃丸タマ幸サイしく骨小中カキらず、肉中カキを洞徹トホ  
て吞口イシと吐口ダと出入カキの両口カキあるものハ、その吞口カキハ小さく吐カキ  
口カキハ大なるが、その中の血カキの凝結カキ多々そのを吐口カキのく、  
洗カキむくして後小棉撒絲ホツシと入前後の口カキを膏カキ若カキく鶏蛋カキ  
棉カキ若カキくハ壓棉スを充カキて褰縛マキをす、カキ小出カキせり、カキ此創口カキ  
の周圍カキハ冷水カキをす、水小醋カキと礮砂ドウ少許カキを加ふるもの  
と以て、冷カキつるを手中カキ小浸カキ、褰縛マキし、後カキも頻カキ小  
洗カキて、皮肉カキの熱カキを去カキべし、或ハ摺布カキ小醋カキと礮砂ドウを加ふる  
水カキを蘸カキ、カキ創處カキ小罨カキをす、カキ膿カキと催カキんとするを防カキが為  
こまに、その劇熱カキを發カキして、膿カキと催カキんとするを防カキが為

なりくもをさても熱消を焼が如くあたりものも既小膿  
を醸んとするものなりま令罨法ハより一うらぎ巻末  
小載する温罨法を頻小行てり此膿を催促べし身熱  
劇く食氣少く膿血多出て日を経るとこふ血液虚乏  
て遂小救がこふいころぐゆふいころ證小ハこふと與る  
劑をあるごと俗家の用る小官製人參を初とと播  
州奥州信州又ハ朝鮮の廣山參や清舶の廣東人參の  
類よまの産よとも一貼三交とたり生薑を加へ濃煎  
て日小二三貼と服しむと預之を蓄んと欲とこふと  
鍊膏とたりて用ると尤り往古高價朝鮮人參の

たり頃より人參ハ此許用とると思はれり  
其真効を知ぬより起こととて此藥ハ性至て緩慢なる物  
なりまバウら證とる必多く用ひねば真効ハ見とるべし  
飯米粥を用ひ滋養小ハ棘鼠魚鯉魚火魚鯉魛比目魚  
鱈魚雞魚石首魚石鮫魚鱸魚鰻魚鯪魚鯽魚鯽魚雞蛋  
の類を撰み食過ぬやふ喫しむとこの防癘水ハ末  
小又方と出とるを用べし骨の裂て離断ぬもの強  
て取こもろく本位小復おけバ大とる自然の機關  
て接續すのなりまとて鍊丸の骨を壊するより腐骨  
疔とたりもあまは左右小最初の治法を遺遺少をぬ

やうの巧手ふして眞實なる醫師を撰で委任屬し、まじ  
鑄丸の肉中に入ぞして、鏡上をとり唯その響動の深く  
内小徹し、その處の皮肉大小膨脹やうて内より破裂  
とあり、こゝに人の怪み疑ことなり、其理を先明む、  
凡人の地上小生活し、掙扎し、天地の間小充塞て、毫  
も虚隙なき大氣の中に在て、外なる氣ハ身體を内へ壓内な  
る氣ハ身體を外へ壓外より壓も内より壓も、悉皆此氣の  
張力より起りて、その根本ハ唯一なり、人の此氣の中に在  
るを譬てい、芥籬をいくつも浮くるもの、内も外も皆  
水るもの、如きものなり、我邦の古典、その根本を天之

御中主神といひ張力を高御産巢日神といひ壓力を  
神産巢日神といひ高と長張の義神と、齒壓の義産  
巢日ハ結成造化の義根本を御中主といふ、所謂未  
發之中と、其義異なることなく、又太極より陰陽の兩  
義を生むごとく、つとものと同く、此の大氣の張と壓との  
對法より、自在の運動を為すものなり、  
四菩薩と其極、然るを鏡丸の奔迸より、此外氣小虚  
音ハ同となり、鳥銃の震動を為す火藥の迸射と、  
隙を生ず、この外氣の奮激して音を為す、その平均を失  
はしむるより、内より卒小膨脹し、遂小ハ破裂して刺創  
の如く小なるなり、この内より膨脹して皮肉破裂し、  
響動の深く内を侵すなり、即ち死す



ものも一又銃丸の肉中へ入ぬゆゑ小唯膨脹するものなるらば  
温罨法を行ひ前篇小出する 緩和膏小片腦を加ふる  
そのを貼て治せしむ 破裂するものハ金創治法小従  
よりたゞその響動深く内を侵する震蕩ふより即死  
をばして餘證を發したる者ハ内科の預こころなるを  
その詳なるはとハ専門の人小問するまふ委任を  
おとたつる。

勇氣を長ざら必驗の妙藥の事

我日本國ハ世界の精華氣の萃こころふして土地膏  
腴五穀豊饒金銀銅鐵を始として一切缺乏物あるま

となく四方小海を環し天然の險を具且暗礁淺  
砂多くして船を寄る小便宜ならん故國土の堅固こと  
自なる城郭の如く人民衆多軍器備足るを以てこまを  
浦安の國とも細戈千足の國とも稱て其義勇の世界に  
冠するはとら此土小生を稟する自然の神宇ふらるも  
のたるも坤輿中小於て此の如く獨我邦の他國小秀  
出ふる所以ハ神代の太古高天が原なる  
高光ハ天照小同く後世天原ぬりよけられ  
高ハ體言して高き  
意ハハレテハ異なり  
天照大御神より  
皇孫瓊杵尊小附  
八咫鏡及草薙劍の神寶と  
皇孫瓊杵尊小附  
八咫鏡を伊勢の  
屬て此土小降臨し  
三

度會小寶劍を尾張の熱田小齋祀多々ひ專武を以て天  
下を治ぶさふを示る多々ひ且寶祚の隆ハ天壤をもに窮  
たつらんそのぞと神勅ありて世界萬國ハ盡く我小歸  
順ぶものごと神の預定おせ多々ひを以て祈年  
祭の祝詞小專小此事を言傳なるなりかく天上より國の  
一系なるハ世界の中ハ唯我邦のみなり故小我 人皇の開祖なる依  
神武天皇ハ日向國より東征して亂を平げ世を鎮たま  
ひなり聖主世々小繼つぎて出多々ひ事あるとさ小ハ天皇  
御自弓取鞞負たまひて不庭を征多々ひを以て公  
卿大臣を始として卑賤者小さる多々ひ盡くその威稜いじ

效奉て仁義の心深く勇悍ゆうぱんなる者ハなりなり  
其後漢土の經籍を傳し其道を明おして益武を  
以て亂小戡文を以て政教を布多々ひ文武相輔あいそくて行  
けり漢土唐の世小專詩文を以て人を取とりり  
つつ其風我小移人詩を賦文を作歌をな題を設  
く詠よむこと起て徒小文華奇藻を慕ぬる世と  
かか上古の風ハはの廢ゆきあふ加るり  
人の心を蕩たて柔弱ふなるりむ竺土の佛法を以てし  
儒教もまた地小墜おちるなり世運大小轉變うつりて天下の  
事ハ大小とたく盡く武家の進退しんたいとなりなり却て古今

未曾有の今乃泰平の御世と云々ぬるハ全く寶劍の鎮  
座と云々乃尾張の國土の靈威より起るものなり  
生ずる頼朝卿の日本惣追捕使と爲内大臣信長公豊國大神  
の此國より生出すもの等々の事をいつるなり  
皇位の隆の天壤  
と共ニ窮なりと云々神勅の應驗の此小至て發現し是亦神  
の幽筭なりと云々然バ往古と當世とハ大ニ異なり我官家  
ハ皇統より出ずるひて往古の天皇の御職事を兼似し  
ハ天皇小代て天下を治て磐石の堅と云々なり  
の至重大任小坐すをバ其下小在と云々の武士ハ位の尊卑  
祿の多寡小拘らざるを士人と稱し者ハつる小昇平の徳  
澤小浴鼓腹世小生得しと云々と云々其大恩に報奉る心

もなく己が職事を疎放して歡樂を事とし酒色小  
耽脆懦億懶の身となり寒と怖暑を厭風雨霜雪小中  
易き怯弱多病なること少くハつるがど弓馬鎗劍を修  
行し軍學銳術を研究しつりとも事あると云々小至く  
之を用ること能ざることを小ハ無益の遊伎小均く盡く  
撒撥りたるものなりと云々豈羞心あるがや然る諸  
侯大身を始として隊長歩卒小つくるものも先其身  
を壯健ししと云々寒暑風雨小堪らるべき體軀となり足恭  
閃掄の行と爲ると云々眞實義勇の志と調煉をむは  
とと第一の急務とし管大臣の教誡の如く虚文を慕

無益の學問を為セどク漢土聖賢の書と讀ミて專道義  
を講究才智を増長天稟受用の日本魂と呼起テ人  
固有の性質ヲ復スべク攝生の道を修行シんことニあり國  
恩ヲ報奉る忠義の最先ニんトどクさトころニなるカらズ且  
士六祿の多少身の高下ヲ拘ヘず必四民の上ニ在リて下ヲ治  
るコころニは重キ職ヲ補翼奉スるコころニあレば其風俗ハ  
良否ハ國家の盛衰の大小關係トころニあリて天下無量  
人ヲ民ヲを誘導シて淳樸忠實の行トころニあリてハむシるコト  
の風トころニあリてハ悉シ皆士人の好尚トころニあリてハ自移  
轉シゆるコトニあリてハ君子の徳と風トあリてハ小人の徳を

草ノ比テ草ノ風ヲ上スむコト必偃スとク孔子ハ力ヲ用ヒて  
なシ故ニ今子孫ヲをシてハ永ク昇平ノ仁澤ヲ被ス無事ノ  
徳化ヲを樂シむコト欲攝生ハ一切驕奢ノ心ヲを先ニ拂  
て淡薄ノ食ヲを甘んト儉約質素ノ獨按摩ヲをシて懶惰  
の宿病ヲを除去スんコトヲ務行テ止ムとク心ハつクハフクシ  
剛毅ヲも智慧ヲも明ク決斷シとク且愛憐ノ情深クなシ  
るコト故ニ草ノ比テ草ノ比テ士ノ行ヲを見慣テ自革シゆクとク必定ナ  
りトよくシてハ如クふシて始メ耕スて食織シてハ  
服ヲ兩刀ヲを帶ヒて鎗ヲ持ツる職ハ合民ノ貢ヲと受下ノ為

不養ヤシキ思オモ報ムシをシ得ユべクをシ今イマのセ世ヨは  
邊鄙カタイナカ不ス住マ居サをシ農ノ民ウ不カ却ヘてシ真マコト實ニ不シ剛テ毅ツをシ  
あまアもシ城シ下ノ衣キ食コをシ商シ家ノハシてシのフ風ク俗ニ薄シ情ニ不  
しテ且カ怯キ弱ヨ偷シ懶シの徒多シをシハシあマもシつラなルをシとシつラ  
商シ家ノハシ平ヘ素ゼ士ノ人ト交ワてシ其ノ驕オゴ奢リ懶ナ惰マの行をシ見ミ聞クよりシ身  
の分限ゲンとシ顧カみテ衣キ服モ器ダ械ウにシ華ウ麗レイとシたク酒サ食シ遊ユ樂レ  
財ツをシ費ヒその富有モ者モ少ナりテハシ吾ワ商シ家ノをシもシ  
忘ワ失レ諸シ侯ノ不ト均トをシ奢オ侈ゴとシたク刺マ士ノ人トもシもシ輕カ慢マも  
のモ亦モ多クなリゆキめス其ノ初ハ武ブ家ノ弊ア風ノ化カをシ  
且シ士ノ人ノ見ミ識シをシ財ツ貨ノ為メ不シ商シ家ノ媚ヘ諂ニの

のアもシふクなリ農ノ民ハ士ノ人ト交ワるモ少ク其ノ驕  
奢シの風をシ視ミるモもシ麤コ食ノ短ト褐ノ事ト足ル心ノ外ハ不  
馳チ多ク物ノ欲ヲの為不シ志ヲをシ屈カるモとシ天  
稟ソノ良質ヲをシ損ソ害ヲあラずバ剛ゴウ毅キ木ノ訥トツの仁不シ近  
とシ行ハ却カるモ農ノ民ノこト不シ存シもシ明ミらズ知ラずシたル  
ことナり又士ノ人ノ家ノ負ツくモ四シ民ノ上ノもシあル  
うラハシ商シ家ノ其ノ志ヲをシ大ニ異ニすルもシ顧カ慮スず  
頻シ不シ商シ家ノ豊ユ饒タをシ羨ウ慕ス心ヲりラるモ商シ家ノ風  
不シ薰カ染レ貪ド欲ノ進ツゆキをシ以テ平ヘ常ノ行モあラずラ  
利ヲをシ先ニしテ義ヲをシ後ニしテ遂ツめズ足ツ奉ヘ伊ヘ優ニの人とシるモ

と大なる恥辱とわらぬやうふたりしあり。故に繁花の  
地をば士民とも小人情の薄くなりぬる。その根本を尋ね  
ば全く士人の行のありきより起ことなる。此を以て當世  
人の病證と熟察せられ。愉懶怯脆より志信を氣屈し  
て體軀憔悴血液の將小凋竭んとする者。名聞利欲の  
汚毒の淹病廢疾少く其原因ハ俱小利と先小義を  
後ふし恥を思ざるより起故小之を治するありとの  
尤難きものなり。孔子も既小この病因と論じて根也  
慾あり馬剛を得んと士の剛毅ならざる病ハ多慾より  
起こととつれり。よりる舊病宿嬰ハ尋常の藥

劑めくハ速効を奏する庸醫の所措小寤感所なり。  
然るを今幸ふしよく此等の病と治し得べきと思  
議の一方を傳授せり。其藥方の名と四維湯と云。藥方  
ハ禮義廉恥の四味なり。此劑ハ心下否塞て上下の  
氣交通せざるより胸腹四末ハ異狀の病苦災厄の常  
小發そのと主治する奇方なり。其方ハ禮を第一の主藥  
とし佐る小義廉恥の三品と以て天地の定理ハ循  
る古昔の鑿聖の製を神方なり。故小今此劑を日々に  
服て止ざることを小士人驕奢の念もつらり蕩滌去る  
心廣體胖ふなり。仁心勇氣も增長し所謂日本魂なる

その自發現て情意舒暢あまらざるゆゑふかづら心  
の真樂を得其功を成の極小至るハ火も燒まらず水も  
も溺む刀劍鈍礮も損傷あらず能ざる身と云々ある靈異  
の功驗あまらざる也且この四品の藥物ハ深谷海底より搜  
得たる物もあらず遠く異域より輸來する物もあらず  
吾人の本性の園中生出るものと採ハ益益茂て氣味  
漸小勝るところハ靈藥と云ふ生涯と云ふと服するも盡る  
あまらざる物なり此中の主藥なる禮の性効ハ天地の法則  
人心の本體より喜怒哀樂の未發とあり中も已小發して  
節小中の和も悉此禮のうちに具て萬物化育の原とも

ものなり我邦の神代より皇統一系よして君臣の名  
分正さとも自此禮ふ合く天地の法則不違ざるハ世界萬  
國小冠する所以にして我邦の神典ハ天之御中主神  
といふ即この禮の本體なり故小の禮を用く吾身  
の分限を守私欲嗜好と省去とくハ氣血の運輸飲食  
の消化も自健ふなりて進退周旋とも不禮の法則不合  
あまらざるを得るやうなるを然らば此禮ハ驕養の行  
と掃除私欲の情を放捐仁愛義勇の心も隨て發る効  
用あるものあり孔子も己小克く禮小復ハ仁と為なり  
一日己小克て禮小復とバ天下仁小歸と云と其功の速るる

ことを稱し、シヨウまじしをり。故ふことを服て怠るオコシラ富貴  
小素て、アリ富貴を行ひ、カシヤシ艱難小素て、シヨウヨウジガイ艱難を行ふ。従容自在  
の身とをシヨウを以て、禮の用を、クワ和を、タツシ資と為と、ワゲ和解の効を  
專小稱せしあり。義ハ心の制事セイの宜きなりと、ヨロシつて此義  
を服て心の制度と正す。れハ、キ機小臨變に應オウずるも、コト事  
くその宜小合、ヨロシキ精神と爽ふ、サヤカ真勇と長ト、ワタシタカ私闘小怯し、  
公戦小勇。火に入水、ワカ伐渉るも自在ジザイなる身とをシヨウのみ  
ならず、ツユ挺と制て、カンニマリ堅甲利兵と、ウツ捷不思議の力用を得る  
あつとをシヨウり、レン廉ハ心志を、キヨク清潔し、アシキオコナヒ汚行と、クダス疎條とをシヨウれ、コウ効  
用あるを以て、ザイ財小臨て、イヤシ苟も得ることなく、ウツ受べらざる

と受が、ウツ取をシヨウらざる、と取を能己ヨク分を守を以て、禮  
義と恥チと小隊伍クニてあまをチ用るなり。恥ハ、キヨジヤクタビヤウ怯弱多病の士  
人及倭諛、オモチリハツシヨク郷原の病ある類ルハ、モトモト功用の最優モトモトなるものにて  
この險悍、キツツヨク傑黠カク兇徒カクたどる、カク對とさ小、タマシ魂褫キ氣懾て、タマシ歎  
小平素の守操と遺失ウシく毛起、マケテ股栗と發する者ハ必用  
重きことシヨウりの藥物シヨウなり。故小古人も、チ恥の人小於る大  
なりと、其功用の大なることを稱し、シヨウなり。此物ハ、タツ速効  
あるものにて、スコン頓服コロシキモノ怯者の歎、ハツ勇氣と發し、オロカ愚者の遽小  
真智と生シざる、コウ効あるハ、オシ己小克て、カク禮小復る、カク仁の本體も、  
自己オシの人小如シざることを、チ恥身と殺て、コロシ仁と為と、シヨウころは



義勇もさきより起る奇品なるが故ふその功用の大きな  
るものと擧て言をこらざるものあり然るときには  
此物を單小用く止むるときは人の人たる道はふまふ  
よつて知あるを得て彼東郭墻間の祭者ふ其餘を乞  
ころろの醜態ハ自放遣く艶美の心思を盡銷燼す必効  
あることも試く自得するそのたり此のふとさ靈驗  
ある四品を合和相互小佐く効用と見ををきそのふ  
まば擧天下の士人をこら此四維湯を服く懈怠みか  
らひれれば此邦天稟受用の義勇のつらら發現て我  
一を以て他の百千に當ことを得るより國家の衛氣のつら

ら張擴く虚隙るふこふつるれば外虜の覬覦へき響寂  
えなく寶祚と磐石の安小置天壤とくそ小窮なき我  
日本國の威稜と萬國の外までも炫耀んあど豈適悅  
あとならざるや

四逆湯

附子 一錢二分より  
乾薑 八分より一錢  
二分許より

甘草 五分より七  
八分許より

右三味水一合五勺文火と以て煎じて六勺ふらる也  
をづて附子の多く入る劑ハ漫火にて濃煎するをよ  
ししを人參を加るときは貼小一錢以上より二錢許ふ  
りり水ハ二合と八勺煎し

甘草乾薑湯

甘草 二錢 乾薑 一錢

右二味水一合二勺と六勺煎我邦人甘草の味と嫌もの多  
けは此方の甘草ハ主薬なれ  
ども分量を減く乾薑と等分小  
りて二錢を用るもよし

此二方のことハ本文小其説あれハ此小載セするなり。

三輪神庫の水腫と治する方

赤小豆 二錢四分 大麥 一錢二分 地膚子 六分

右三味各別小炒イリて後小合アセて水二合と八勺煎ト日

小三貼ツ用乾姜縮砂シヤなどを加カすもよしこれを用る

ちハ鹽シホを緊キムシく斷タて唯赤小豆ハりと煮ニて飯メシふく

喫クむく林一鳥ガ水腫スイシュと治スる方とすハれあり。

箭鏃ヤシリあらび銃丸テウバと出スる方

蟾カマ螂ギリ 三箇シヤク生活シヤクするまと紙シ帛ヒを三重サウ中チウて入イれ二十日ニじ

小ウらを一箇シヤク別ヘて帛ヒ入イれ陰干ハす此物江

戸ウらを得エる陰干ハす此物江薬ヤク鋪キョふ蓄もとるの新シン鮮

蝸牛カク 一箇シヤク皮ヒを去クて陰イン干ハす。

牛蟲ウシムシ 三箇シヤク陰イン干ハす。

右三味細末トモミダラして燈油トモミダラを用ヒて飯糊メシリ小和調チリシて創上キタふ貼シ

る武門故實百箇條小曰鏃射ハ射イこみるの意

過スてハ違チガハ違て振ぐこの意なり。

軍士ハ常ニ鎧ヨロヒの引あそを不用意をささハ、其の箭鏃ヤシのき  
の藥をり、あそを貼ツクまわつるを、深く射イらるる鏃ヤシの  
ても出デぎとらふあそを、矢の筈ユの折ユるハ、此  
藥あそを、拔ヒキぎ、盛長日記を、其外の古書中、  
此藥の効あそを、神君も、殊の外御秘藏あ  
そ、一、ついで傳ツクへる、試コトビふ釘クギを柱ハシなど、打ウちみて、此藥  
を貼ツクあけ、翼ツバ日ヒの釘クギの頭カビを、出デるを、鐵テツと吸ス  
と、ろけ、カ磁石シマ小優マきり、と、ついで、

同箭鏃と出デる方

蟾螂一箇 巴豆 半箇

右ニ味同く研ハキて、傷處キズ小傳ツクまわつて、微痒カサと出デる  
を、忍コラて、極痒キハヤカクく、堪タへ、こゝろ、小つ、ま、は、搥カサて、こゝろを  
拔ヒキそのあそを、黃連貫衆ワウレンクワンジュウの二味と湯ユ煎ケンし、  
洗ワシつる後ノチよく拭ヌグと、石灰セキガイの極細末と傳布ツクを以  
て縛カサおくべし。  
此方、漢土の醫書イ出デる、一方、前マの牛蝨ウシノシあ  
ど、の得エ、こゝろ、こゝろ、試コトビ用ツクべし。

防腐水

蘆薈ロカイ 乳香 沒藥 各等分、藥鋪ヤクヤ小煉シ沒藥  
國クニより出デる、種タネの樹脂シヨウジなり、華ハ沒藥モツと呼コトぶ、其のハもと紫ムラサキ銅ドウの丸マダラ物モノ  
ろく、天竺テンシク暹羅センラ錫蘭シヤクランなどより出デる、こゝろ、樹脂シヨウジちと、性セイ効キウの殊トク物モノ

異ものちりこび代用ふをちりこびて誤混ざることを要す。煉液薬ハ凝結を釋諸痛を止乳香と同く腐蝕を防の効ある物たるを蘆薈を以て血液の凝滯を溶解効ある物あるを傷處痛劇とさふ去る用ることあり。

右三味各別小細末として性烈焼酎小浸こと三日三夜薬多くして焼酎少々を溶解して砂土を小底に残すのちありとみば上清と紙にて濾過し横小重で濾たり。再濾て紙小残する滓とみに焼酎とよき程小入て一日を歴て再紙にて濾て聽用。

又方

硃砂 五錢 生石灰 十錢

右二味焼酎の性烈その五十錢小浸て暫くおきて

上清を紙みこし濾し撒綿絲若ハ布に懸て傷處小深く挾入る。うきうきと用て創處を洗つてもよし。この鏡創の膿を醸て腐蝕甚く壞疽小ならんを恐るものを防小用るなり。生石灰は血を止る効あり。前編ふも既ふらるごとくをなれ。

温罨劑

苦蕒花 當歸 小茴香

右三味木綿の帛小入熱湯中へ浸して絞て患處を慰此薬ハ凝結を散まらぬ膿をも促たり。若熱劇く疲倦甚く脱疽狀小ならんとするものハ此

温菴劑ハ用ぐりし。それハ盧會没藥龍腦薬舖小白手と物を用  
 して。三味各二交を各別小細末少して。酒二合厳酢五  
 勺小浸し。微温てこきを洗べし。ちここの劑を用て。  
 創中と洗ふもちこし。そまふハ冷エつるまくともち  
 ふるちり。

此他ハ前編小載し。まハ参考て用を。

救急摘方續編

八華の灸所乃圖

和釋ハ紙燃ハ口吻の角より角の寸  
 を下唇の赤白際ハひてそり。それを二折  
 その折目を臍へあて。両端左右  
 二折小點し。ま紙燃を  
 臍へ折目を  
 臍へ當て。  
 上下二所の  
 端小點し。  
 その上下の  
 点へ燃子とあて  
 左右四所小點を。上下  
 左右合ハ八所ハを。花の  
 灸ハ。痢病霍亂の吐下甚ハもの。  
 及ハ。癰疽飲ハ。灸ハ。て。し。  
 傷寒の陰證の灸不可ハものも。  
 此處ハ灸して効を得ること多し。



藜蘆

和名 日光らん

志ゆらさう



別小伊吹藜蘆といふハ  
江州小産をこれハ藜蘆の  
説一木藜蘆といふ二種なり  
また勢州經が峯野州日光山  
湯本のありより生ず春早く  
芽を生ずる故小雪り草の  
名あり。此二種葉狭く

一々花緑色の物あり。尾州方言  
青柳草といふ。此木藜蘆と呼  
ぶハ和名ラズ。此ハ蘆を殺  
すものゆゑ小味醬小蘆の生さ  
るふこの艸を入る。味原の如  
くふちを以てみる。此ハ  
一とも蘆のこの物殺  
蟲の効あり。此ハ吐劑  
とはいひがく。此ハ  
別種なるを。

江州伊吹山小多。佐州野州日光山よりも多く出を。此小日光らんの  
名あり。春宿根より苗を生ず。葉の濶五六分長一尺バ。深緑色堅小皺  
多く。稜缺小似る。根の年を経るものハ葉の濶三四寸ふ。夏月  
一莖と抽で長二三尺小葉互生ト。枝毎小紫黑色の小花を開く。大  
は三四分六瓣。真氣あり。後小短扁莢を結ぶ。中実あり。根の味辛く  
簽。藜蘆の説小葱白藜蘆といふ。根の葱根小似る。此ハ此の根  
を薬用とす。生ずるハ吐の効殊小優まり。

常山蜀漆

和名 こくさぎのぐさ

やまうらぎのて 蜀漆葉

とんむい 紀州方言

みみのちや 越州方言

一種 和名 たうのさ

海州常山

人家小多くある灌木なり

葉ハ白桐小似て小さく

臭氣あるを以て

臭梧桐の名ある

此樹の毒く瘡疾を

治すといひて

くさぎのちとよふもの

これなり

常山根 蜀漆ハ苗物小  
して兩名此物ハ灌木小  
して草本とあるが長ト  
六七尺小及ぶものあり  
諸州深山小多し人家の  
藩籬となす枝幹青  
白色葉ハ辛夷小似て  
や小かく光あり臭氣  
甚し二三月の頃穂を出  
し小かく綠色花を開く  
大三四分ハ四瓣ありま  
淡黄色のものあり蕪頰の  
説小葉似茗而狭と云ふ  
茶葉の常山小して真物也



藥舖小苗來の常山あり同物  
にして即雞骨常山たり形細  
きを雞骨常山と云ふ世小  
瘡の截藥とて常山といふもの

苗と根と各別小  
丸小苗を用ひ  
發日の曉小根を  
用ひ吐を  
とつて治  
すもの  
と云ふ

常山ハ  
舶來と  
呼とまらざども  
近世偽雜多  
海州常山の根と  
黄色小染て賣もの  
あり吐の効なき小  
つら根と藥用小必  
このころさきの根枝  
用とす



一種土常山と呼ものあり絞股  
藍小對して木ありちやと云ふ花  
の形蝴蝶花小似たり灌漑小用  
その是を常山の類小あらす

苦瓠

和名小瓜ひさご

壺盧和名小瓜ひさごの類ふく味苦く毒ありて喫ら  
 ざるものなり故小苦壺盧ともつり俗小瓢草と呼ぶ  
 是たやまの子穰と日小乾つるを細末して  
 四五分より一錢許を用まばよく吐を催す  
 瓜蒂をさして代用まば此物を丸薬うて  
 用まば水を寫す効あり故本草も大水  
 面目浮腫及黄疸腫滿等不用く水と瀉  
 ことをいふやまの蛇蟲と逐効をも  
 いふやまの試べり壺盧苦瓠と物なる  
 が故小壺盧を多く苑中小植  
 する近旁小苦瓠もつる  
 一莖ありても壺盧盡く變  
 じて苦瓠となること予も  
 嘗てこれと自驗する  
 ありあり無毒淡味  
 喫らざる壺盧の



苦味毒ありて穰子の吐下を  
 劇性の物と變むる人の惡小化  
 易き獨の薛居州  
 宋王を如何と  
 孟子の嘆一實小  
 然ることなる





厩馬新論

一冊 既刺

此書ハ今の世の乗馬の仕立々々ホテハ軍中に用ひざることと論。且費少くして馬を飼ひくまこと詳小記。馬の病を察せざることやでとも書載るものなり。

硝石製煉法

一冊 嗣刺

我邦小産する硝石の萬國小勝まゐることと辨。江戸より自身小硝石を製造せらるる法を詳小記。合藥の秘事やでとも書著しつるもの也。

日本開闢由来記

繪入平々ハ讀本 七冊 一夢道人著

日本の太古國を開くよとの世界小比類な萬國小冠つるべき國土たるよと古書よりして詳小記。蒙古襲來神風の船を覆と一こまを述べや。まを魂を引起さしむるところに書をたり。

安政三丙辰歲稟准刊行

同四丁巳歲六月發兌

江戸書物問屋

横山町三丁目

和泉屋金石衛門



